

平成26年度 国立教育政策研究所 文教施設研究講演会

地域の核となる学校づくり

日本とスイスの学校建築



スイスは、日本と同じく天然資源が少ない小さな国ですが、世界有数の科学技術先進国であり、PISA(OECD生徒の学習到達度調査)でも、上位の成績にあります。市町村にもその地域に適応した教育方針が立てられるよう自治権が与えられ、地域を支え、伝統をつなぐための象徴的な建築物として学校建築が位置づけられており、地域力を結集して「地域の核となる学校づくり」が進められてきた伝統を持っています。日瑞国交樹立150周年を迎えた節目の平成26年度文教施設研究講演会は、将来の日本の学校建築の新たな視点等について、スイスの経験から学ぶとともに、両国の研究交流を目的として、両国の専門家3名を招へいし、関係機関と連携の上、「地域の核となる学校づくりー日本とスイスの学校建築ー」をテーマに開催します。



ウルス マウラー 氏
ArchiLecture & LearnScaping
教育施設プランナー
教育と建築ネットワーク会長

演目：スイスの学校建築計画



ジョー カミナダ 氏
スイス連邦工科大学教授
建築家

演目：学校ー地域の建築ー



長澤 悟 氏
国立教育政策研究所客員研究員
東洋大学名誉教授

演目：日本の地域を支え、心をつなぐ
学校づくり

報告書

平成27年1月21日(水)

13:30-17:00 文部科学省第2講堂

主催



文部科学省
国立教育政策研究所

共催 東京工業大学教育施設環境研究センター

後援 スイス大使館
一般社団法人日本建築学会



平成26年度 国立教育政策研究所 文教施設研究講演会

地域の核となる学校づくり 日本とスイスの学校建築

平成27年1月21日(水)
13:30-17:00 文部科学省第2講堂

プログラム・目次

I 挨拶 ----- 5

1. 開会

2. 主催者挨拶

大槻 達也

国立教育政策研究所 所長

3. 大使館関係者代表挨拶

ミゲル・ペレス

スイス大使館 文化・広報部長

II 基調講演 ----- 11

1. 「スイスの学校建築計画」

ウルス・マウラー

ArchiLecture & LearnScaping 教育施設プランナー
教育と建築ネットワーク 会長

ウルス・
マウラー 13

2. 「学校ー地域の建築ー」

ジョン・カミナダ

スイス連邦工科大学教授, 建築家

ジョン・
カミナダ 33

3. 「日本の地域を支え, 心をつなぐ学校づくり」

長澤 悟

国立教育政策研究所客員研究員
東洋大学名誉教授

長澤 悟
53

III パネルディスカッション&質疑応答 ----- 81

コーディネーター

木下 勇

千葉大学大学院園芸学研究科 教授

IV 閉会の挨拶 ----- 95

齋藤 福栄

国立教育政策研究所文教施設研究センター長

※参考データ アンケート結果等

平成26年度 国立教育政策研究所 文教施設研究講演会

地域の核となる学校建築

ー日本とスイスの学校建築ー

平成27年1月21日(水) 13:30~17:00 文部科学省第2講堂



主催者挨拶

大槻 達也
国立教育政策研究所長



大使館代表挨拶

ミゲル・ペレス
スイス大使館
文化・広報部長



講

演

ウルス・マウラー
ArchiLecture & LearnScaping
教育施設プランナー



講

演

ジョン・カミナダ
スイス連邦工科大学教授
建築家





講演 長澤 悟
東洋大学名誉教授



コーディネーター 木下 勇
千葉大学大学院 教授



パネルディスカッション



閉会の挨拶 齋藤 福栄
文教施設研究センター長



会場の様子

I. 挨 拶

主催者挨拶

大槻 達也 国立教育政策研究所 所長

■司会 皆様こんにちは。本日は、大変お忙しい中、ようこそお集まりいただきました。

私は、本日の司会を担当いたします国立教育政策研究所文教施設研究センター総括研究官の西と申します。よろしくお願いします。

それでは、ただいまより、平成26年度国立教育政策研究所文教施設研究講演会「地域の核となる学校づくりー日本とスイスの学校建築」を開催させていただきます。

初めに、主催者を代表いたしまして、国立教育政策研究所所長、大槻達也より、御挨拶を申し上げます。

■大槻所長 ただいま御紹介いただきました、国立教育政策研究所所長の大槻でございます。

本日は、平成26年度国立教育政策研究所文教施設研究講演会に、多くの皆様にお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。

さて、学校は、全ての児童・生徒が自立して社会で生きていけるよう、その基礎力を培う場であり、生活の一部とも言える場所であります。また、地域から見れば、地域社会の将来を担う人材を育てる核となる場所であり、重要な役割になっております。

そのため、平成18年に教育基本法の全部改正が行われましたが、「学校、家庭、地域住民等との相互の連携、協力」という条文が設けられまして、家庭と地域住民の教育の役割が、そして、それらと学校との役割、連携、協力ということについても規定をされているところでございます。

しかしながら、近年の日本では、急速な少子化、過疎化や、大震災等の影響から学校と地域のバランスを保つことができず、学校を新築、改築する際に、もう一度地域のきずなを強め、地域づくりの担い手を育てるような、地域の核となる学校づくりが、これまで以上に求められております。

東日本大震災後、当研究所が行いました「学校の復興とまちづくりに関する調査研究」におきましても、津波被害を受けた多くの地域で、地域コミュニティーを維持するためには、将来の担い手を育てる学校が不可欠であることが明らかとなっております。

また、スイスは、日本と同じく、天然資源が少ない、国土面積の小さな国でございますが、世界有数の科学技術先進国でもあり、OECDのPISA調査でも上位の成績にあります。

市町村にも、その地域に適応した教育方針が立てられるよう自治権が与えられており、

地域を支え、伝統をつなぐための象徴的な建築物として、学校建築が位置づけられております。地域力を結集して、地域の核となる学校づくりが進められてきたという伝統がございます。

本日の講演会は、日本とスイスの国交が樹立されて150周年を迎えるという年でもございます。将来の日本の学校建築の新たな視点についてスイスの経験から学ぶことを目的に、学校建築計画の専門家であるウルス・マウラー博士と、建築家でもあるスイス連邦工科大学のジョン・カミナダ教授、日本からは、当研究所の客員研究員であり、学校建築の権威である東洋大学の長澤悟名誉教授と、コーディネーターとして、千葉大学の木下勇教授をお招きし、文教施設研究講演会「地域の核となる学校づくり」をテーマに開催するものでございます。

今回の開催に当たり、スイス大使館及び東京工業大学教育施設環境研究センター等、関係の皆様の御協力に感謝し、心よりお礼を申し上げます。

本日は限られた時間でございますが、この講演会が地域とその核となる学校づくりの在り方を考える上で有益な知見を得る機会となり、今後の子供たちの学習環境向上のための学校施設の充実に寄与することを期待いたしまして、簡単ではございますが、冒頭の挨拶とさせていただきます。

本日はどうぞよろしくお願いいたします。

■司会　大槻所長，ありがとうございました。

大使館関係者挨拶

ミゲル・ペレス スイス大使館 文化・広報部長

■司会 次に、協力機関を代表いたしまして、スイス大使館、ミゲル・ペレス文化広報部長より御挨拶申し上げます。

■ペレス文化広報部長 皆様、こんにちは。

大槻国立教育政策研究所所長様、御来場の皆様、本日はどうもありがとうございます。国立教育政策研究所の主催により、本日の研究講演会「地域の核となる学校づくり」の開催に当たり、大使館を代表いたしまして御挨拶できることを、大変うれしく思います。

本日の開催、おめでとうございます。

毎年、文部科学省のもとで開催されています文教施設研究講演会に、今回、スイスの学校づくりを取り上げていただけることになりましたことを、とても光栄に思います。

学校づくりにおける総合意見交換や、スイスの経験を聞いて、スイスの建築家や日本の建築家の皆様、研究者の皆様が、何らかのインスピレーションを与えられることになれば、とてもうれしく思います。

近年、日本では、建築への関心が大変高まっていますが、スイスと日本の建築分野においても相互交流が盛んになってきています。

例を挙げさせていただきますが、昨年より今年の3月まで開催されています、日本とスイスがお祝いをしております国交樹立150周年に当たり、建築分野においても展覧会が開催されました。日本、スイス、コンテキストの中で建てるという展覧会に、スイスで建築を手がけられた日本人の建築家の作品が紹介されました。

また、スイスにおいても、建築は大変関心が高いテーマであります。日本においても、スイスの有名な建築家の名前が知られてきていると思いますが、ル・コルビジエ、ヘルゾクト・ミューロン、マリオ・ボッタなど、彼らの建築作品が日本にもございます。

今後ますます日本とスイスの建築における交流が深まることを祈っております。

本日、スイスから来日されています建築家のマウラー氏、また、カミナダ氏、並びに、東洋大学の長澤先生による講演が、スイスの学校建築の側面はもとより、スイスの社会が選んだ建築という背景を学ぶ機会になればと思います。

最後に、本日のシンポジウムの開催に当たり御尽力いただきました、スイスの学校建築を紹介する機会を与えていただきました国立教育政策研究所に心より感謝申し上げます。また、特に、スイスの先生方を招へいするに当たり御尽力いただきました千葉大学の木下

勇先生にお礼申し上げます。

本日のこちらのシンポジウムが、今後ますます、スイスと日本、両国において素晴らしい学校づくりのきっかけを与えることになることを心からお祈りいたしております。

ありがとうございます。

■司会 ペレス文化広報部長，ありがとうございました。

Ⅱ. 基調講演

スイスの 学校建築計画



ウルス・マウラー 氏

ArchiLecture & LearnScaping
教育施設プランナー

教育と建築ネットワーク会長

■司会 それでは、早速、基調講演に入らせていただきます。

本日は、3名の方に基調講演をお願いします。

最初は、ウルス・マウラー博士に講演をお願いします。

マウラー博士は、スイス連邦工科大学で建築学科の助手から小学校の教師へ転身された経歴をお持ちで、現在、教師の経歴を持つ建築家として、「教育と建築ネットワーク」の代表を務められ、多数の学校設計のコンペ、企画運営に携わってこられました。

また、スイス大手建設会社バーズラー・ホフマンの専門指導者として活躍されております。今回は「スイスの学校建築計画」をテーマに講演をお願いします。

■マウラー博士 (スライド1) 御来場の皆様、本日は、まず、国立教育政策研究所の皆様、そして、私の長年にわたる友人である木下教授にこのような機会を頂きましたことに対して、心よりお礼申し上げます。

ジョン・カミナダ教授とともに日本に招へいいただきましたことは、非常に大きな栄誉であります。また、私にとってはこれが2度目の来日になりますが、今回の講演会、そして、エクスカッションを、私の妻であり、また、仕事上のパートナーであるリサ・リトリヒと一緒に経験をさせていただけることも感謝しております。

15年前に、私は実は長女と一緒に来日いたしました。ちょうど今回、カミナダ教授が初来日ということで、御自身の御子息を連れていらっしゃっています。当時の私と同じような状況です。

私には3人の娘がいますが、彼女たちにこう約束したのです。「皆二十歳になるまでたばこを吸わなければ、好きなところに旅行に連れて行ってやる」と。そして、それが功（こう）を奏したのか、二十歳になるまで娘たちはたばこを吸いませんでしたので、先ほどお話ししましたように、15年前の2000年に長女と二人で桜の頃の日本に来たわけです。

私の本日の講演タイトルですが、「スイスにおける学校建築の建築言語」というものがあります。(スライド2) 最初に、ウィンストン・チャーチルの言葉を引用したいと思います。「人は家をつくり、家は人をつくる」。

スイスにおける
学校建築の
建築用語

Architektursprachen von Schulbauten Urs Maurer, Architecture & LearnScaping Tokyo 21. Jan. 2015 1

スライド 1

「人は家をつくり、家は人をつくる」
ウィンストン・チャーチル

Architektursprachen von Schulbauten Urs Maurer, Architecture & LearnScaping Tokyo 21. Jan. 2015 2

スライド 2

(スライド3) 私の講演ですが、3部構成となっております。時間の関係で、一部割愛しますので御注意ください。まず、一番目が、言語としての建築、二番目が発達の場合としての学校、そして三番目が、スイスの学校建築における無意識的、意識的目標像であります。

(スライド4,5) 私の今回の講演タイトルは、建築計画であります。この前提にあるのは、建築は言語であり、言葉のように読んだり理解したりすることができるということであり

ます。

通常の言語と同様に、建築には三つの異なった側面若しくはレベルがあります。

一つ目は、建築における音声学、Phoneticsですね。これは直接的な感覚的作用、あるいは、響きであり、それによって使用されている材料の形や表面を見ている人に生き生きと伝えるというものです。

二つ目が、建築の構文論、Syntax、すなわち、文法、規則であります。これは構造であると解釈することができます。また、私が20世紀、そして、今世紀の最も重要な建築理論家とっておりますクリストファー・アレグザンダーが、建築と都市計画の上位に位置する秩序様式と呼んだような、基本的様式又はパターンです。

三つ目が、建築物の意味論又は趣旨あるいは意味であり、それによって建築物の機能やメッセージが、見る者、利用する者に伝わります。

(スライド6) 建築言語の重要かつ特殊な区別方法として、建築物を二つのカテゴリー

1. **用語としての建築**
2. **発達の場合としての教室**
3. **新しい訓育としての教室の発展と職業**
4. **スイスの学校建築における無意識の・意識的なロール・モデル**

Architektursprachen von Schulbauten Urs Maurer, Architecture & Learning Tokyo 21. Jan. 2015 3

スライド 3

1. **用語としての建築**
(建築が伝えるもの)

Architektursprachen von Schulbauten Urs Maurer, Architecture & Learning Tokyo 21. Jan. 2015 4

スライド 4

建築の言語使用域

1. 音声学 = 感覚的作用
形、表面
2. 構文論 = 文法／規則
構造、「様式」
3. 意味論 = 意味／主旨
機能、メッセージ

Architektursprachen von Schulbauten Urs Maurer, Architecture & Learning Tokyo 21. Jan. 2015 5

スライド 5



住宅棟および実用本位の建物 => 「一般建築」
地元の言葉と方言の多様性

スライド 6

に区別することができます。

一つ目のカテゴリーは、居住用・実用建築物、若しくは、一般的な建築であります。このカテゴリーには、たくさんの地方言語と方言に区別することができ、表現形式と材料は、気候によってかなり異なっています。しかし、いずれの場合も、実用性若しくは利用価値が課題の中心にあります。

左の写真は現在、激戦が続いているシリアとトルコの国境地帯にある、粘土造りの住宅群という形の居住用・実用建築物です。使用されている材料は粘土、牛ふん、わらと木材でこれら全ては、近隣でとれるものであります。

右の写真は、スイスのヴァリス・アルプスの溪谷に建つ住宅群であります。壁は欧州モミの丸太でできていて、屋根は、ヤニを含んだカラマツを加工したこけら葺きです。

(スライド7) 建築物のもう一つのカテゴリーは、象徴的あるいは祭式用の建築物であります。ここでは実用性ではなく、象徴的価値が中心となっています。

この二つの写真に写っている垂直なエレメントですが、左はイスラム教寺院のミナレット、右は鐘楼ですが、いずれも天と地のつながりを象徴しています。

写真の二つの建物は、その表現形式と素材が、先ほどの居住用・実用建築物の場合と同じように著しく異なっていますが、両者に共通しているのは、何か特別なもの、永続的なものに対する要求であります。

左の建築物は、数百年前のセルジューク人のモスクです。アタチュルクが率いる軍隊によって完全に破壊された古い都市に唯一残っている建物です。

右の建物は、スイス、グラウビュンデンの山村の聖ベネディクト教会です。キリスト教の巡礼者が参っていた霊場教会の基礎の上に建っています。現在も霊場教会であります。巡礼者には敬けんなキリスト教信者は少なく、多くは世界中からの建築家で、例えば、日本の建築家もたくさんいらっしゃいます。

これを建てたのは無名の建築士や職人ではなく、プリツカー賞を受けた世界的に有名なピーター・ゾンターです。

(スライド8) この建築物のカテゴリーについては、礼拝あるいは聖職者の建築という



スライド7



スライド8

こともできます。現代に至るまでは、少なくとも地元の人たちは、言うまでもなく比較的容易に建築の言語及び方言を理解できました。なぜなら、よく目にする建材を使って、伝統的手工業と、地元の模様で形づくられているからです。その例の写真ですが、左の写真はオスマン帝国の時代の民家です。イスタンブール郊外のユスキュダルに建っています。

既に先ほど名前を挙げましたアメリカの建築家クリストファー・アレグザンダーによる学校の例が右の写真（埼玉県入間市学校法人盈進学園東野高等学校）です。意識的に日本の建築や手工業の伝統から選択した基本様式やパターンをベースにしているので、近代の国際的なスタイル要件としては典型的ではなく、1970年代後期のいわゆるポストモダンの時代における、近代からの離脱の試みとアプローチであります。

本日会場にお越しの方で、この学校に行かれたことがない方はいらっしゃいますか。行かれたことがない方は、是非行って見てください。スイスからよりずっと皆さんの方が近いところにいらっしゃいますので。

（スライド9）近代とともに登場したのが、国際的スタイル、そして、金融経済のグローバル化及びその利益最大化への偏向とともに登場したのが、投資用建築です。もはや近代初期の機能形式を追求するのではなく、高い利益率、合理化、多機能性という三つの目的だけが追求されています。

左の建物は教育大学で、右は有名なスイスの大手銀行ですが、ぱっと見ても、あるいはじっくり見ても、その形及び表現からは、そういう建物だということはわかりません。

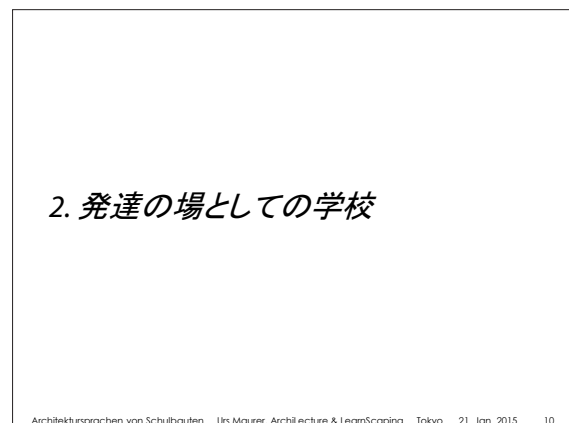
（スライド10）では、二つ目のテーマである「発達場としての学校」に移ります。

私は、大学で学んだ後、長い間教育学の実践に取り組んでまいりました。同時に、6人の孫を持つ祖父でもあります。その立場から、児童及び青少年の発達段階における基本的概念を、物理的な空間と関連させながら幾つか紹介してまいります。

（スライド11）赤ちゃんは劇的な環境変化を経て誕生するわけですが、その後は、まず、母親と乳房を含めた肉体が赤ちゃんにとっての外界の全てになります。それに守られて、温かい思いやりの中で、3歳までは、赤ちゃんは自分の小さい指、手、足、腕を駆使して、子供部屋、家、中庭、庭園を探索します。



スライド9



スライド10

4歳から6歳頃になりますと、土、水、空気、炎、石、花、やぶ、木といった要素が取って代わるようになります。幼稚園や、村や、町の近所にある自然の中で、子供はこれらの空間や要素を、大人とは全く違ったやり方で体験します。

私にとっての偉大な指導者の一人である意識研究家のジャン・ゲブサーは、この異なった経験的世界、あるいは、意識の質を、乳児期については原始的、そして、幼児期については呪術的と呼んでいます。

(スライド12) 小中学校に通う年齢の7歳から14歳の間の最初の3年は、まだ呪術的世界に生きています。しかし、家畜と野生の動物に強く引かれるようになり、遊び仲間が一段と重要性を増してきます。

11歳から14歳の時期は、自分を見つめるようになり、自己批判的になります。この時期になると、神話的な経験的世界で生きるようになり、偉大な模範、英雄、神々のストーリーを求めるようになります。

ジャン・ゲブサーを読んだことがなくても、この原始的、呪術的、神話的といった概念を具体的にイメージすることができます。『ハリー・ポッター』のおかげで、呪術的という概念を子供や青少年でも豊かに具体的にイメージできるようになりました。

神話的意識構造をジャン・ゲブサーは、古代ギリシャ、ローマから中世後期に関連づけておりますが、今日においても人気を博した叙事的映画『指輪物語』や、多くの人気SF映画で再現されていくことができます。例えば、『スター・ウォーズ』などです。

思春期になると、この意識の質は徐々に解きほぐされ、因果的で分析的な鋭い思考によって、精神的・合理的な意識の質に取って代わられます。このような意識の質が、ヨーロッパでは、ルネッサンスに始まり、啓蒙思想で強まり、自然科学によって浸透したのと同じです。両親や教師といった権威の次は、仲間集団内の価値と行動がますます重要になってきます。

ジャン・ゲブサーの『起源と現在』という著書、そして、同時代に生きたアメリカのジョセフ・チルトン・ピアスの『マジカルチャイルド』という著書を読むことをお勧めします。この2冊は、本来、大学の教養課程で取り上げるべきだと私は思っています。そうすれば



スライド11



スライド12

多分、これほど多くの若者が心理学を大学で学ぼうとは思わなくなるでしょう。というのは、より深く学ばなければこれを仕事にするのは難しいとわかるからです。

私は、幼稚園から小学校において、子供たちが小さな未熟な大人のように見なされてそのように扱われているということは、世界的な悲劇的事件だと思います。例えば、幼稚園ではおとぎ話を読み聞かせることもなく、小学校で神話を読み聞かせることもなくなっています。

(スライド13) この図は、子供の発達段階を示しています。緑の下降曲線は、行動が自然から受けた影響及び行動パターンです。ブルーの上昇曲線は、文化から受ける影響です。ここでは、意識の質を改めて該当する発達段階に割り当てて示しています。

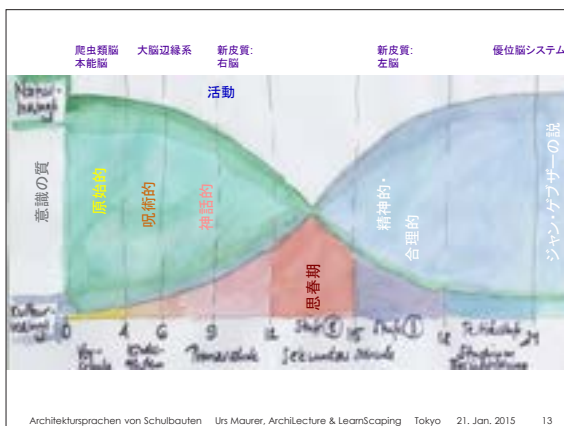
原始的というのは乳児期、呪術的というのは幼児期、神話的というのは小学生の時期、そして、精神的・合理的というのが中高生です。

この図は、思春期という難しい時期に注目しています。なぜなら、この年齢の頃に行動が非常に不安定になるからです。その理由は、自然の影響は明らかに減っているのに、文化による影響がまだ明確に優勢になっていないからです。この図から、外部空間の重要性と、授業構成への帰結について指摘したいと思います。

すなわち、人間が最も動きたいと欲するのは8歳から13歳の頃だということです。したがって、現在の通常の学校で行われているよりも、この時期に自由に体を動かす遊びや、芸術的要素までもを含めた体育の授業により注力し、時間と空間をかけるべきだということです。

ジャン・ゲブザーの概念は、新しい脳科学に基づいています。どの脳システムが個々の発達段階において支配的であるかが脳科学的に証明されているのです。原始的な段階では虫類の本能、そして、呪術的は大脳辺縁系、そして、神話的時期は真皮質右脳ですね。そして、精神的・合理的段階では真皮質左脳となっています。

(スライド14) このチャートでは、既に述べてきたジャン・ゲブザーによる四つの意識の質が示され、左の関連する文化の転換期と、右の最も重要な空間的要素との関係にある短いキーワードで特徴も示されています。時間の関係で詳細は割愛いたしますが、後でま



スライド13



スライド14

たゆっくり御覧いただければと思います。もっといいのは、ジャン・ゲブサーのオリジナルを読むことです。

中心に幾つかの信号が見えますが、これは意識の次元性を意味しています。原始的には次元はなく、呪術的一つの次元、神話的は二つの次元、そして、精神的・合理的は三つの次元となっています。ここで空間的な視覚に到達しました。

ここで大人の方々に問いたいと思います。近代、すなわち、精神的・合理的、この時期の後に来るのは何でしょうか。ジャン・ゲブサーは、そのライフワーク「起源と現在」全体でこの問題に取り組んでいます。現代の生活様式から生じる問題を解決するために、かなり前から新しい意識の質が必要になっています。「イスラム国」のような原理主義的な集団からその魅力を奪うために、これは暴力以上に必要です。

10日前にパリで150万人の人と各国の首脳が、連帯して「欧州の基本的価値を守る」と表明したことは、良いことであります。しかし、もっと多くのものが求められているのです。それは、現在の経済的、社会的、政治的、そして、空間機能的システムを、自然と共生できる、命と人にやさしいシステムに劇的に転換することです。

運用上の基本概念であるトランジションタウン、きっと聞いたことがあると思いますが、これはパーマカルチャーの方向に進む世界的な動きです。これに、ジャン・ゲブサーの精神的な中心概念を付け加えたいと思います。ジャン・ゲブサーは、現在求められているこのカテゴリーを「総合的な意識の質」と名付けています。ここで、精神性の社会文化という中心的な概念が示されています。

日本では、この精神性への転換は、ヨーロッパより早く容易にできるかもしれません。なぜなら、日本では呪術的で神話的なものが、常に精神的・合理的なものと並行して途絶えることなく、軽んじられることなく受け継がれているか、又は、一般的な冷笑主義が避けられてきたからです。

(スライド15) 私は、2007年にアインドホーフェンで博士論文を書いたのですが、その中で、建築の意識的及び特に無意識的な目標像に取り組みました。私の講演の最後の第3部でそれについてお話をします。特に、スイスの学校建築と関連づけてお話をします。

3. 新しい訓育としての教室の発展 と職業

Architektursprachen von Schulbauten Urs Maurer, Architecture & Learning Tokyo 21. Jan. 2015 15

スライド15



象徴的建物の典型:
堂々たる校舎、ゼーヴィス (グラ
ウブュンデン)

実用本位の建築の典型:
校舎と体育館、ファナス (グラウブュン
デン)

スライド16

先ほど紹介した二つのカテゴリー，すなわち，居住用・実用建築と象徴的・祭式的建築に関してですが，学校建築はどちらなのかという問題があります。

（スライド16）この写真は，グロウビュンデンの隣接する二つの山村にある二つの小学校です。左はゼービスの学校，右はファナスの学校です。私立学校という同じ機能を持つ建築物であるにもかかわらず，この二つの建物は大きく異なっています。材料の持つ効果においても，全体の印象においても異なっています。なぜでしょうか。

左のゼービスの学校が20世紀初頭に建てられた頃は，いわゆる義務教育というのは，児童・生徒が労働力として必要とされている時代であったため，当たり前のことではありませんでした。

アルプスの少女ハイジとペーターも，いつも本を読んでいた熱心に宿題をする子供としては描かれていません。病弱な大都会の娘クララとは対照的に，ハイジとペーターはアルプスの生活の中の仕事の手伝いをしていました。ゼービスの学校は，当時の山村の人々が学校を誇りにしていたということを表現していたので，領主の館の建築要素を備えた象徴的，祭式的な建築であります。

（スライド17）100年後，義務教育は当たり前となり，そのため，右のファナスの学校は，普通の建物の控えめな言語を使用し，左の建物とは違い，教育学や発達心理学的の視点からは極めて高い実用性を持っています。

これに対応するテキストです。住民が学校を誇りに思う結果，学校は象徴になりました。さらに，教育的課題に配慮した結果として，現在この建物は新しい実用性を持つようになっています。

（スライド18）学校建築は，象徴的建築物又は祭式的建築物ではなく，匿名性を持つ普通の居住用・実用建築物のカテゴリーに属するかどうかという問題が，最終的に解決したとお考えになるとしたら，それは間違いです。その理由は，世界的に建築界は極めて不安定になっているからです。私は混乱していると言えると思います。さらに，祭式的・象徴的建築がますます居住用・実用建物を征服しているからです。

ここで，ジャック・ヘルツォークの自宅の例を紹介いたします。これはヘルツォーク &

山岳地域の学校に対する地元住民の誇り

表象としての建築：
高い象徴的価値

一般的な就学義務、今日では自明かつ当たり前の無名の建築：
高い利用価値

Architektursprachen von Schulbauten Urs Maurer, Architecture & Learning Tokyo 21. Jan. 2015 17

スライド17



ヘルツォーク&ド・ムーロン: klingendes Wohnhaus ヘルツォーク&ド・ムーロン: デュジョンの学生寮
ヘーベルシュトラッセ, バーゼル (1982-1988) (1991-1992)

世界的に有名なスイス人建築家ヘルツォーク&ド・ムーロンの作品における
異色の当惑させられる 破壊 1988~1991年

スライド18

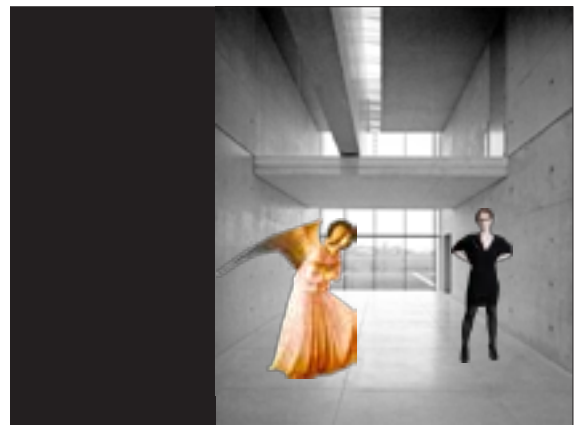
ド・ムーロンによる、バーゼルの旧市街にある木造建築です。80年代初めの設計で、私はこの住宅を見たときに大変感激し、私の妻と、3人の娘と一緒に、すぐにでも引っ越してきたいというような気持ちにかられたのです。10年後ですが、世界的に有名になっていたヘルツォーク&ド・ムーロン共同事務所がディジョンで、全く反対の貯蔵庫のような、平凡で相加的なフォルム言語による学生寮を設計しました。内心の意識的又は無意識的な目標像のどのような変化が、二人の極めて優秀な建築家の作品にこのような断絶をもたらしたのでしょうか。

(スライド19) これを理解していくために、私は皆さんに幾つかの写真をお見せします。2005年頃に建てられた、ベルギーの建築家、アネカトリ・ベルディクトの住宅兼アトリエです。これは建物全体の外観です。ここがリビングで、ここが台所です。どうでしょう、皆さんびっくりしましたでしょうか。あるいは、ショックを受けたでしょうか。その理由は、プロジェクトには祭式用建物又は、宗教用建物という目標像が根底にあり、使用を目的とした住宅ではないことが明らかだからです。

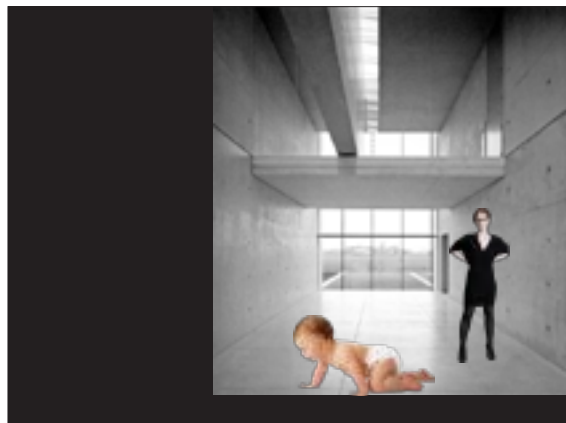
(スライド20) この住宅の中で、彼女が若いゲストを招待するのは想像できます。しかし、もしいつか彼女が妊娠して子供を授かるという、天使の告知を受けたとしたらどうでしょう。(スライド21) この女性建築家が、賞の対象となり、したがって有名になったこの家に母親になっても住み続け、転居しないと仮定してみます。皆さんは遅くとも今、彼女は



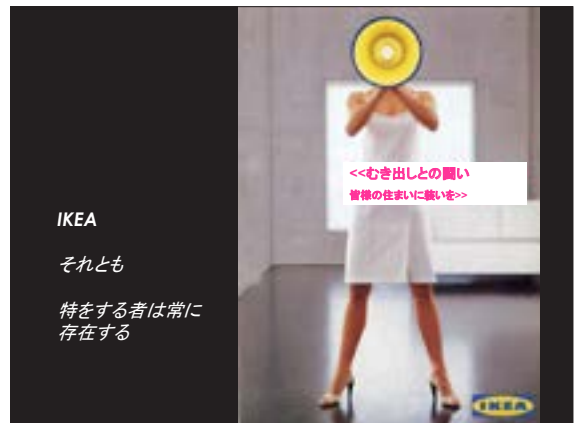
スライド19



スライド20



スライド21



スライド22

その時点で、何かが調和しないことに気付きます。つまり象徴的価値は、子供の成長のための建物の利用価値というものとは全く対立しているのです。

(スライド22) これは家具会社イケアのカタログの表紙に写った若い女性のスローガンです:「むき出しと戦おう。住まいに装いを」。住宅を内装なしにしておくという状況又はトレンドから儲けるクレバーな人はいつの時代でもいるとだけ言っておきます。

(スライド23) 私は長いこと、住居の概念の原形を探してきました。そして、やっと、ユルト、遊牧民の天幕に出会いました。もし皆さん全員がこのような形で住んだとしたら、イケアは存在しないでしょう。

(スライド24) 今日は、スイスで学校計画の建築言語、そして、その無意識の目標像についてお話ししていますが、これは、アルプス地方の中学校の二つの事例で最も簡明的確に説明できると思います。

二つの事例には、10年の間隔があります。左は、1999年に完成した、パスペルスの校舎で、この建築で有名になったスイスの建築家バレリオ・オルジャッティの作品です。右は、2009年に完成した、無名の建築家による南チロルのヴェルスベルクの校舎であります。二つを見ていただいて、恐らく材料においても、印象においても、似た点があると考えられると思われます。(スライド25) 両者の十字型の平面図で比較してみますと、類似は極めて明確です。私は、ヴェルスベルクの校舎を造った建築家に「似ているのではないか」と



スライド23



スライド24



スライド25



スライド26

いうふうに言いました。彼は、ばつの悪そうな顔をいたしまして、実際にパスペルスモデルにしたことを否定しませんでした。しかし、彼の出版物には、オルジャッティの出版物とは異なり、平面図には家具が加えられています。これは、高い教育機能上の使用価値を与えようという彼の努力を表しています。

(スライド26) 授業中の両者のアクセスゾーンを子供の視線で比較いたしますと、二人の建築家の姿勢が全く違うのが明確にわかります。左側はコンクリート製のプレーンな表面で形式的な空間配置、それに対し、右側は利用者にやさしく、教育学的に現在の水準にある形態で、極めて利用価値が高いものです。

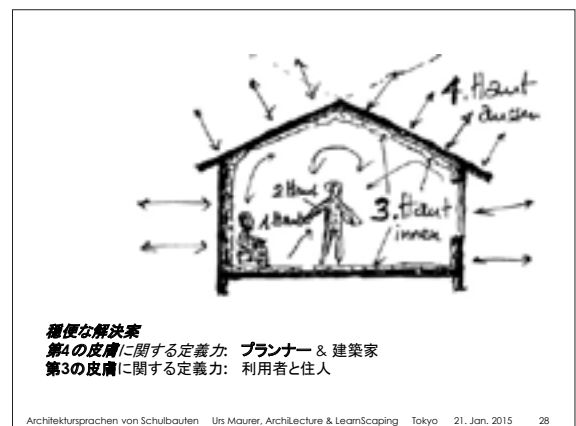
これが両者の相違です。右側の例では、建築家のクラウス・ベルビーゲが、初めからこの学校の校長、ヨセフ・バッチンガーと密接に協働していました。

(スライド27) これはチューリッヒの校舎であります。無愛想な演出を見ていただけるとと思います。このようなコンクリートのつくりが、学校や、そしてまた、職員から大変大きな批判を受けました。結局、チューリッヒの市役所がこの建物をどうにかしようということで、建築家の友人のペインターに頼んで、子供にふさわしい色とりどりの色で塗らされました。最悪の音響は改善することもなく、そしてまた、生徒たちもこの色は最低であると評価をしております。

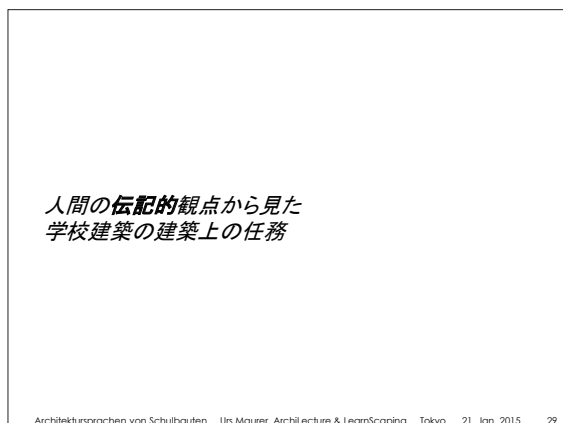
(スライド28) 建築家は、格付を上げるために、象徴の価値を利用価値よりも高く設定



スライド27



スライド28



スライド29



スライド30

必要があるので、私は、私の博士論文で、ある一つの提案を行いました。

建築は洋服という人間の二つ目の肌が続く人間の三つ目の肌を形成するという、建築生物学的な考え方を基にして、この三つ目の肌を三つ目と四つ目に分割することを提案しました。外から見える四つ目の肌は、引き続き建築家や専門設計者の定義力の範囲内にあるのに対して、内部に効果を生ずる三つ目の肌については、今後は利用者の定義力に含まれるべきです。

(スライド29) それでは、学校建築というものが居住用・実用建築のカテゴリーに入るのか、あるいは、象徴建築の中に入るのかという質問に答えるために、学校建築の特別の役割を人間の一生と関連させてとらえていきたいと思います。

(スライド30) こちらのスライドを見てください。100年ほど前の人間の一生の概念を示したものがあります。人間が徐々に年を重ねていくことがわかんと思います。私は、これに典型的な建築の役割を私は振り分けていきました。

左の方ですが、これは人間が誕生する、つまり、ゆりかごがシンボル化されております。右ですが、これは死んでいく、つまり、棺のシンボルです。建物の役割は左から上に向かって、山小屋、戸建て住宅、アトリエ、工房、それから、人間の頂点の城などです。ここに学校も加えますと、右側が下降していることが明らかになります。例えば、病院、博物館、教会、兵舎、山城、石碑、火葬場とシェルターを選びました。

(スライド31) 小学校の建築はこの中のどこに位置するかを議論する必要はありません。つまり、誕生の時期の近くで、死の時期からは遠く離れています。幼稚園や託児所は、左側の誕生のすぐ近くです。小学校、中学校そしてギムナジウムも、この早期の生・誕生の側です。

1950年代、つまり中期の現代の時代ですが、住宅はその機能及び意味からして、火葬場とは全く異なる形をしていなければならないのは当然のことでした。

この住宅兼アトリエの事例であります、ブルース・ゴフという建築家がつくったものであります。これはカタツムリの家を構想しております。このような住宅というのは、当然のことながら、火葬場とは全然違うわけです。



スライド31



スライド32

これはフィンランドの建築家がつくったものであります。アルバ・アアルトという建築家ですが、彼自身は、有機的な建築言語として知られていましたが、ここでは厳しい形状の火葬場をつくっております。

スイス、そしてまた、中央ヨーロッパ全体におきましては、建築の役割と人間の一生における意味の明確な区別は、学校建築のコンペの審査委員には余り重要視されていないと思います。

(スライド32) 左ですが、これは典型的な受賞作品で、ベルリンにおける校舎の連邦コンペプロジェクトのために審査委員によって施工が勧告されたオブジェクトです。右側ですが、これは全く違った校舎で、ケルンにありますシュタイナー学園の教師陣が直接発注した校舎になっております。これを設計したのはシュツッドガルト建築事務所「バウプルス」の所長、ペーター・ヒュープナー氏です。木下先生がヒュープナー氏を1年ほど前に日本に招待したことを私は聞いております。大変すばらしい選択だったと思っております。

(スライド33) 現在では、少なくともスイスやドイツにおきましては、公的な学校建築コンペについては、プロジェクト開発及び建築事務所の選定に関して強制的な目標像が必要です。子供、生活及び学習に適した学校を建築したいのであれば、そのような教育学上の強制的な目標像を作成する必要があります。これによって審査員は、委託の際に強制的にこれが義務づけられていることになります。

(スライド34) 私は、博士論文の中で、拡大していく首都圏における学校建築の手本とすべき目標像というものを考案しました。これを簡単に御紹介していきたいと思っております。

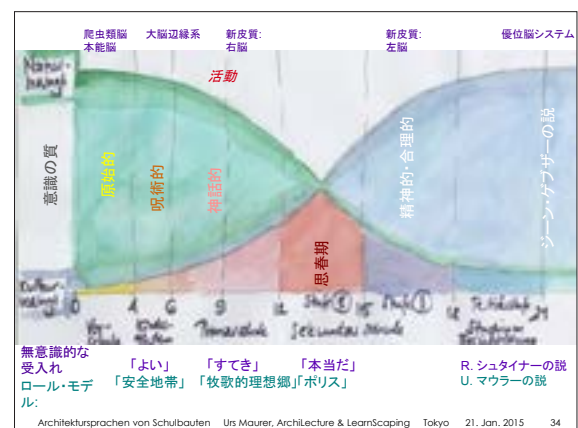
首都圏における学校建築の目標像の前提となっているのが、先ほどお話しいたしましたジャン・ゲブサーによる意識の質の発達モデル、それから、ヴァルドルフ教育の中心的概念「良い、美しい、本当の」であります。

ルドルフ・シュタイナーは次のように言っています。つまり、小さな子供、特に幼稚園児の年齢の子供は、世界は「良い」という無意識な想定の中で生きていて、小学生の年齢の子供は、世界は「美しい」という無意識な想定の中で生きていて、中学生の年齢になる

プロジェクトを企画する前に: 教育空間のロール・モデルを開発する。

Architektursprachen von Schulbauten Urs Maurer, Architecture & LearnScaping Tokyo 21. Jan. 2015 33

スライド33



スライド34


と、世界は「本当」であると想定しています。

教育を受けた現代の大人である私たちは、人間というのは悪い人間もいるし、醜い建物もあるし、社会というものは不誠実な社会もあるということがわかっているわけですが、学校建築においてはこの理想にできる限り適合することが重要です。この三つの倫理的概念から私は、三つの教育空間上の基本概念をつくり出しました。それが安全地帯、二つ目が牧師的理想郷、そして、三つ目がポリス、共同体というものです。

(スライド35) 教育学及び学校空間は、人間の進化という視点から、例えば東京のような、全く新しい種類の首都圏というビオトープとともに突きつけられている大変困難な課題に対して、次のように答えることができるでしょう：学校空間は、これまでの何もない空間から、生活し、体験し、そして発展する空間になる必要があります。学校空間は、新たに重要な役割を担う必要があります。つまり次の要素に対する身体的・感覚的及び情緒的・精神的な関係を、次の順番で中心に据えるという役割です。つまり、幼児期及び幼稚園児の年齢では、水、空気、火という要素との関係、小学生の年齢では共存している生物、つまり植物や動物との関係、そして中学生の段階では手本及び専門家としての仲間・隣人との関係です。

(スライド36) まず重要なのは、伝達すべき内容の決定ではありません。むしろ、何が正しいかを初めから学べるように生活条件を創出することの方が重要です。これは、ウル

教育学による解答



→ 教室は**生活の場**・**体験の場**であると**同時に発展の場**になる

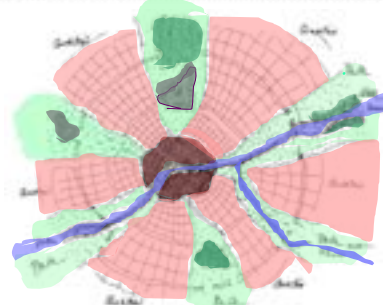
→ 以下の各構成要素との物理的・感覚的・精神的・知的な**関係**の推進：

土、水、空気、火：	エレメンタリー・ステージ
共存する生物：動植物	初等教育段階
仲間・隣人：手本、専門家	中等教育段階

Architektursprachen von Schulbauten Urs Maurer, Architecture & Learning Tokyo 21. Jan. 2015 35

スライド35

「重要なのは、伝達すべき内容の決定ではない。むしろ、何が正しいかを初めから学べる生活条件を創出することが重要だ。」(マンフレート・シュビツァー 2002 年)
児童や青少年の自然との正しい関係は、何物にも代えがたい。
児童は自然、太陽、土、水、火、動植物、森、岩を非常に好む。



ロールモデルのための枠組：
「安全地帯」
「牧師的理想郷」
「ポリス」

スライド36

この発達段階にある児童は、世の中とはよいものだと思われながら生活している。この年齢の児童は、独自の**牧師的世界**に生きている。
感覚の発達には、**最大運動スキル**の発達と密接に関連しながら、**自然の中の構成要素**を原則的に扱う中で最も効果的に生じる。



「安全地帯」としてのエレメンタリー・ステージ
4〜7歳ごろ

スライド37



スライド38

ム出身の高名な神経生理学者マンフレッド・シュピッツァーの言葉です。

その際、重要なのは、子供や青少年が自然と触れ合うことは何物にも代えられないという考え方です。子供は自然、太陽、土、水、火、植物、動物、森そして岩が大好きです。そのためには、高度の都市計画及び政治のレベルで、自然の回廊（ここでは緑のくさび）を創設するか、又は緑の回廊がある場合はそれを保護するという決定をする必要があります。

（スライド37）クリストファー・アレグザンダーは、都市計画のための彼の最初の、最も重要な最初の基本パターンの中で、この回廊を「フィンガー・オブ・ネイチャー」と名付けました。これは「安全地帯」という主要概念による、幼児期及び幼稚園児用のテント、小屋のような単純な家のスケッチです。

（スライド38）時間がないので、講演の初めに配布したまとめは読みません。スイス、そして、ドイツにおきましては、「森の幼稚園」という大変成功した運動があります。夏でも、寒い冬でも、9時から15時まで、子供たちは森の中で時間を過ごします。この写真のように避難小屋さえない場合もあります。これは、本来なら私たちが建てた幼稚園の競争相手です。

（スライド39）手塚建築研究所は、東京のふじ幼稚園で、自然の回廊がない場合の安全地帯という要請を、設計上で見事に解決しています。私は数年前に、手塚さんに会うため



スライド39



スライド40



スライド41



スライド42

に、パリの会議に出席しました。

昨日ですが、私は妻と一緒にこの幼稚園の園長さんともお話をしました。成功した例としてお見せした、ヴェルスベルクの中学校やケルンのシュタイナー学園のように、カリスマ性のある校長が施主の代理人として建築家に協力しました。教育者、インテリアデザイナー、そしてその夫人たちの熱心な協力がなかったとしたら、建築家はこのような単純な解決法は決して思いつかなかったと思います。

今日は皆様のために、山岳地帯における学校の完成した目標像は作っていません。なぜならこれは、現地の人との共同のプロセスの中でのみ可能だからです。したがって、周辺の人口減少地域においては、その地域にふさわしい独自の目標像を開発することが重要です。

(スライド40) 安全地帯は、保護された室内だけでなく、木の間をぐるぐると走り回ることによる、教育的訓練ではない原始的で魅力的な喜びをもたらす、人が通れる屋根でも作られます。(スライド41) 下の図から、幼稚園児が幼稚園に着いてから15分間に、どのような行動をするのかというパターンが見て取られます。(スライド42) これは昨日の写真です。動物との強い関係と言いましたが、この幼稚園においては、誕生日を迎えた子供が仔馬(こうま)に乗ることができるそうです。

私がパリで会った手塚さんが、これは普通の学校ではなくモンテッソーリ学校であることを講演では全く触れていないことがその兆候でしょう。つまり、教育のモンテッソーリ理論が、ここでは極めて強く影響しているからです。

(スライド43) これが水という要素の写真です。この要素は大変重要であると申し上げました。よく見ると、ひねって止める必要のある蛇口があります。自動蛇口はあえて使っていません。これによって子供は、水はボタンを押すだけで出てくるのではなく、水は慎重に扱わなければならない、本当に必要な量の水だけ出してから、蛇口をひねって止めることを学びます。

(スライド44) これは、牧歌的理想郷の目標像のスケッチです。

(スライド45) ここでは子供が、ヴァルドルフの学校ですが、ビーリフェルトにあります



スライド43



スライド44

す学校で、動物の世話をしております。ここに「餌をあげるとき以外はウサギに近づいてはいけない」と書いてあります。つまり、世話の焼き過ぎはストレスを生んでしまうので、子供が書いたものです。

(スライド46) これらの写真は、グラウビュンデン州のムッテンの山間部の学校です。この後、カミナダ先生からも山間部についてのお話があると思います。都市の状況とは本当に正反対ですね。ここでは、諸要素、植物、動物、手本や専門家との関係を、現在のところは、費用のかかる教育上の対策によって可能にする必要はありません。なぜなら、それは環境や村のコミュニティーによって依然として存在して幾らかです。アフリカのこと



スライド45



スライド46



スライド47



スライド48



スライド49

わざに、「子供を教育するのには村全体が必要である」というものがあります。これが、まだ存在している現実です。

(スライド47) 私は日本に来る前に、山間部の学校の生徒たちに、学校建築の専門家として、日本に行くことを話すと、みんなの目が輝きました。(スライド48) 私が生徒たちに、5歳から12歳という年齢に対応した、全く異なる内部イメージや精神的感情を呼び起こしたにもかかわらず、彼らは、私が日本で本日重要なゲストにこの写真を見せることを知って、それをとても誇りに思っています。ムッテンの生徒たちは、今日、先生と一緒にあって、東京に思いをはせてくれているのかもしれません。

アルプスの少女ハイジとヤギ飼いのペーターは、現在では、首都東京でも、一つの神話になっていると思います。しかし、生徒たちの利発であると同時に夢想的な目との短い出会いで、何らかの原像的な力を知覚しました。

(スライド49) どうも皆様、御清聴ありがとうございます。(拍手)

■司会 マウラー博士、ありがとうございました。

講演

学校 —地域の建築—



ジョン・カミナダ 氏

スイス連邦工科大学教
建築家

■司会 それでは、スイス連邦工科大学、ジョン・カミナダ教授に御講演をお願いします。

カミナダ教授は、大学で教鞭を執る傍ら、建築家としてスイスの山岳地域、故郷フリン村を中心に、学校を初め、様々な公共建築、住宅等を、地元材を活用するなど、地域建築の伝統文化に配慮した、地域になじむすばらしい作品を多数つくられておられます。

2006年には、ドゥビン村の学校でアルプス新建築賞、2010年にはスイス芸術賞を受けられるなど、スイスの代表的な建築家として活躍されています。

今回は「学校－地域の建築－場所をつくるということ」をテーマに講演をお願いいたします。

■カミナダ教授 （スライド1,2）皆様、こんにちは。これはロマンス語で、世界では少数派です。私はロマン人です。イタリア語、フランス語、スペイン語の間のどこかに位置するラテン語系の言葉です。

このようなシンポジウムにお呼びいただきましてありがとうございます。私にとって大きな栄誉でございます。私は、先ほどお話がありましたように、初めて日本に参りました。この日本という国には、前から感銘を受けていました。

この世で最も素晴らしいと私が思っているのは、多様性、そして、違いであります。私の講演では、相違という概念を使います。関係概念は少し難しい概念です。相違がなければアイデンティティーは存在せず、アイデンティティーがなければ相違は存在しません。

この対照において重要なのが、共通点になります。共通点は、異なった立場を結びつけるものであります。共通点があれば、戦争は回避できます。共通点是对話の出発点です。今日は皆様と対話をできることを非常に楽しみにしております。

私の講演では、教育について広い視点からお話をしたいと思います。教育と経験について、そして、大学での教育と研究について、そして、スイスの山岳地帯の建築について、また、周辺地域、地方の新たな在り方についても考えてみたいと思います。

日本とスイスは距離的にかなり離れてはいますが、抱えている問題点は共通点が多いと思っています。力を合わせて解決の糸口を見つけていければと思います。実は昨日長野に

ジョン・A・カミナダ

場所をつくるということ

スライド 1

テーマ 1

スイスの
山岳地帯

スライド 2

行きまして、日本の山岳地帯を見てまいりました。そこで気付いたのは、本当にスイスと日本は似たような問題があるのだなということです。

(スライド3) これは私の故郷の村、フリンです。スイスの典型的な山間部にある村です。多分、ほんの少しだけモデル村落です。スイスは非常に多様性に富んだ国です。東京のような大都市はスイスにはもちろんありません。スイスの人口は800万人強、国土の大部分を山岳地帯が占めています。この山岳地帯について、今日は御報告いたします。

山岳地帯は、そこで暮らしていない人々にとっては、長らく生命を脅かす恐ろしい場所でした。このイメージは、過去数百年の間に観光が盛んになったこともあって変わってきました。モビリティと交通網が整備されたことによって、山間部の生活は格段に楽になりました。行政は既に20世紀初頭から様々な取組を行っており、山間部に暮らす人々の生活環境を改善していきました。農家への補助金により、人口流出を抑えようという地域政策は、1970年代に行われました。新しい政策は、競争を促して、それによって経済全体を強化していこうというものです。

今振り返って言えることは、政策によって山間部における人口流出をある程度抑えることはできたけれども、止めることはできなかったということです。人口流出は今でも続いています。今日、山間部の暮らしを脅かしているのは、雪崩や土砂崩れといった自然災害より、むしろ経済を支える基盤がないこと、将来展望が開けないという点であります。

実際、「補助金など減らして、インフラも住宅地もあきらめて、地域を自然のあるがままに放置したらどうか」という声をよく耳にします。これは多くのスイス国民にとって新しい考え方です。そうすると野生の動物がかつ歩するようになりますから。

この二つの考え方の間で、新たな選択肢を見つけるというのが、現代の私たちに課せられた、また、私たちの将来に対する大きな課題です。経済的な基準にのみ基づいた判断では、山間部の暮らしを存続させていくことはできません。

以上、現状を取り巻く政治的、経済的文化的背景について簡単に御紹介しました。では、このような中で、建築は何ができるのでしょうか。建築で問題をどう解決できるのでしょうか。



スライド3

まず、今日の建築の潮流について少し批判的に考察してみたいと思います。私たちが暮らす場所、風景、建築は、どんどん似てきています。その主な理由は、まず、通信環境です。今や世界中どこでも通信できます。そして、モビリティ、時間をかけずに場所を移動できます。さらに、複数の場所に今私たちは帰属しているということです。同時に、複数の場所で生活しているということです。絶対的な場所というものがなくなってしまいました。つまり、つらいときも、良いときも、いる場所というのが、もう今、ほとんどなくなってしまっています。

例えば、冬、寒くなったら南の方のイビザ島に行き、暑いときは別のどこかへ行きます。私たちは、常に同時に複数の場所に逃げながら生きています。これはすばらしいことですが、似てきてしまっているということの理由は、複数の場所に帰属しているという要素も入っています。

そして次の理由は、今日では建築する際に、多数の材料から好みの材料を選択することができるという点です。いわゆる、選択肢があるということです。

これらの現象によって、建築は、似たような形になるのです。それにもかかわらず、私は、これまでの成果をすばらしいものとしてとらえています。しかし、これは技術に対する批判ではありません。技術的成果もすばらしいものです。

さらに、昨今の建築を見てまいますと、建築に対象性の傾向が認められます。マウラー先生が先ほどお話になったように、アイコン建築という話もありましたが、その人の思いといった、そういう要素もあると思います。

建築の対象性という潮流は、少し問題だと私は思っています。対象性とは、建築のみへの集中ということです。対象性では、人間、その人間が望む生活感、その実体性、肉体を余り考慮されていません。対象性では、多分本来のコンテキストが軽視されています。その結果、建築物が存在しても、有効な力を持つ場所が生まれず、したがってアイデンティティを有する場所が生まれません。当然のことながら、場所に関連した建築にも対象性があります。

このような潮流に対して、何をすべきでしょうか。この潮流に対抗する建築の中心的思想は、相違であります。いわゆる建築の相違です。この相違は、直接の場所、その場所のみとの関連性から生じるものです。

違いという中心的思想に基づいて建築するとは、その場所固有のもの、その場所の力を活性化し強化するということです。範囲を特定した要素内の材料を使用することが、ある場所の独自性を強化することになるか、又は強化する可能性があるのです。例えば、私は特定の周辺地域からの材料を使用します。あるいは、常にそこにある風や天候のような自然現象を考慮することもそれにつながります。あるいは、特定の文化、その場所の人たちが持つ特別な知識を設計に取り込むことによって可能になります。

違いはアイデンティティを高めるためのものであります。一昨日聞いたのですが、日本では、アイデンティティというのはちょっと難しい概念であるというふうに伺いました。アイデンティティとは、ある場所への帰属性を高めるということですが、しかし、

これは、国家に対する帰属意識を高めるとか、そういうものとは全く違うものです。私は、人が親近感を覚える場所をつくり出したいのです。つけ足しますが、日本の方は本当に日本に対して、誇らしく思われるべきだと思います。

私の仕事では、一方では現実も考慮すること、片足は常に現実においておくことも重要です。現実とは、実際はどうかということですが、ユートピアへの視点もあります。ユートピアは、本来は楽園であり、どうあり得るかという問いです。

(スライド4) これは、林業に携わる人たちが教育を受ける場所です。子供たちが教育を受ける空間でもあります。(スライド5) この建物の意図は、五感を高めることです。つまり、五感を強化する機械です。どのようにして熱が生まれるかを体験するためです。

真ん中に薪ストーブがあります。薪を入れるとゆっくり暖かくなります。そこで生じる熱は、ふく射熱で、感じるができます。ふく射熱は対流とはまた全然違う熱です。この熱では、あたかも手に乗せて運べるように感じます。

また、この空間というのは、様々な表面を楽しむことができます、そういう空間でもあります。手でさわっていたり、薪の匂いがしたり、そして、木を味わうことができます。また、景色もすばらしい風景ですね。自然を眺めることができます。これがこの家の基本理念でした。

(スライド6,7) では、フリン村の話に移ります。フリンは私の故郷であります。私はこ



スライド4



スライド5

テーマ 2

山村 フリン

スライド6



スライド7

こで、多くの経験をしました。私にとっては、試み、経験の場所でした。これは、重要な教育の種類です。

(スライド8) これまで私たちが何を実現してきたかを、幾つかのプロジェクトを使って紹介します。

フリン村は、ロマンス語圏にあります。ロマンス語を話す人は、スイスの人口の約0.7%になります。フリン村の現在の人口は、約250人です。私はここで生まれて、現在もここに住んでいます。

(スライド9) これがフリン村の写真ですが、コンパクトな村です。小さな畜舎も見えます。そして、道も見えます。この村が地形の中に溶け込んでいる様子がよくわかります。実際は、地形が村の形をつくり上げました。また、耕作地の跡も見えます。この跡は、数百年前からの耕作停滞形態です。

(スライド10) これがフリン村の古い畜舎です。これは、フリン村の古い地域です。農業というものも変わっておりまして、より大きな新しい畜舎が建設されました。農業が発展する際の関心は「農民は、村にとどまる」ことです。私たちは農村を維持したいと思っていました。村の幾つかの畜舎は維持され、引き続き農業に利用されています。家畜用の畜舎、雌牛用の畜舎、ヤギ用の畜舎です。村周辺部に新しい畜舎を建てまして、畜舎群という形で拡大していきました。規模がどんどん大きくなっております。

テーマ 4

フリンで実現された プロジェクト

スライド8



スライド9



スライド10



スライド11

(スライド11) これが新しい家畜小屋，畜舎ですね。大型化したものです。古いものは小さすぎました。新しい経営では，前よりも多くの家畜を飼っています。現在は農家が生き残っていくためには，以前より多くの家畜が必要です。これは，上空から見た畜舎です。ここでは繰り返しがテーマです。これは私の建築における極めて重要なものです。この繊細なニュアンスです。

(スライド12) 畜舎を下から見た状況ですね。構造がよくわかります。

(スライド13, 14) また，食肉販売店も建てました。地元でつくったものは地元へ還流しよう，価値創造は地元で全部還流させようという考えのもとに，食肉製造販売店も村の中につくりました。遠いところにある屠殺場まで家畜を運ばなくても，ここで屠殺からするということです。そして蓄肉は村内で処理し貯蔵され，そこから販売されます。

(スライド15) 私たちは，ヤギの飼養も開発しました。フリンでは牛と羊のほかに，ヤギも飼養されています。ヤギは山岳地帯に非常に適した家畜です。夏はアルプスの大きな畜舎に農家全体のヤギが入り，ヤギの乳を使ってチーズをつくります。これが雌ヤギで，これが「ボス」で，雄ヤギです。ヤギの乳というのは独特な味がします。

(スライド16) こちらが公民館になります。主要部分に増設された新しい部分です。これはフリンで最も古い建物で，1736年に建てられたものです。右側の部分を壊して新しくつくりました。古いものは畜舎が付いていたのですが，畜舎の部分を壊して新築しました。



スライド12



スライド13



スライド14



スライド15

ですので、新旧の建物が組み合わさっています。

(スライド17) こちらが電話ボックスです。スイスの村落では、電話ボックスはどれも非常に似ているのですが、フリンは違います。木造で、地元の職人が建てました。

(スライド18) また、製材所も建てました。ここでは樹脂が加工されています。フリンの村域の大部分は森林ですので、その森林資源を利用します。フリンにおいては、木材は単なる資源ではなく、知識の蓄積であり、生計の手段です。地元の製材所で加工する木材は、卸業者から購入するほかの産地からの木材とは違います。

(スライド19) 霊安室も建てました。死者を安置する場所です。死に対する扱い方というのは、過去数十年で大きく変わってきました。フリンでも、典礼は当たり前のことではなくなりました。2000年まで、フリンでは、亡くなった人は埋葬の日まで3日間自宅に安置されていました。そこで、公の安置場所をつくったのです。この霊安室は、フリン村の人々が長い時間をかけて議論した結果です。典礼は受け継がれていますが、拡大され、変化しています。写真に写っているのは霊安室ですが、世俗的な領域と、宗教的な領域の間に立っています。

住宅用の建材で建てたのですが、塗装にはカゼインを使いました。白い色によって教会への関連づけを行いました。この、世俗的と宗教的の関係は、私たちにとって非常に重要です。霊安室は、村のヒエラルヒーの新しい構成要素です。重要なのは葬列です。埋葬の



スライド16



スライド17



スライド18



スライド19

日、死者を収めた木製の棺は、霊安室を出て、村の中を通り墓地まで担がれて運ばれます。私にとって、そして多くの人にとっても、葬列は葬送儀式の中で最も情緒的な瞬間です。

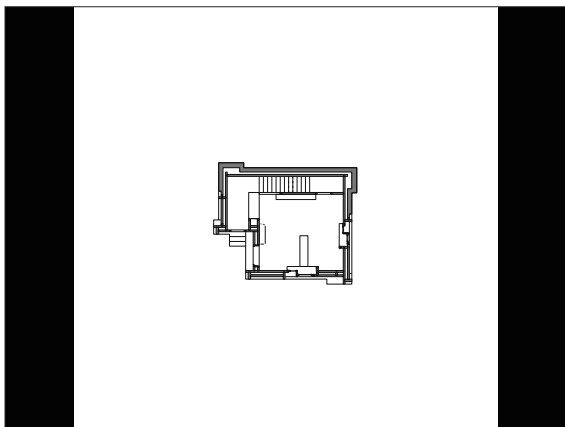
（スライド20）これは霊安室、建物の平面図です。1階に入り口と階段がありまして、棺の安置場所が描かれています。上からの入り口もあります。2階には、人々が集い、語り合っ、また、コーヒーを飲むなどして過ごせる部屋があります。これは、死の悲しみを克服するためのプロジェクトです。

（スライド21）こちらが、墓地から霊安室に向かう写真ですね。（スライド22）これは内部の写真になります。この建物は、組積構造で作られています。

以上が村のインフラ改善のために私たちが実施してきたプロジェクトの事例でした。

（スライド23）もちろん、学校もあります。これは学校の写真です。努力のいかなく、村の学校を存続させることはできませんでした。児童生徒の数が少なすぎるからです。子供たちは今、谷間の開けた場所にある学校に通っています。スクールバスが送迎していて、距離は約10キロです。

ここで考えなければならないのは、村の学校だった建物を今後どう利用するかということです。教育の場所を私たちは放棄したくはありません。都市の人々が自然に接しながら様々な経験ができる教育と活動の場所にしてはどうかと考えています。これには都市と地方の関係が重要で、そうでなければこのようなプロジェクトは実現できなくなります。



スライド20



スライド21



スライド22



スライド23

私でしたら、工房として利用したいと思います。工房は、様々な活動のための作業場です。都会から訪れる人たちに開放する工房です。

山間部において手工業は、農業と観光業と並んで将来有望な潜在的可能性だと思っています。

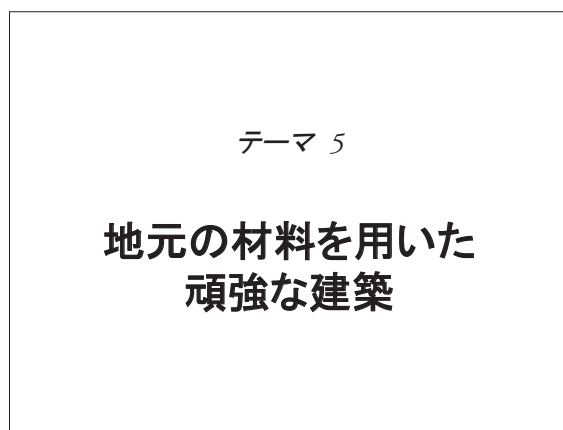
(スライド24) こちらが多目的ホールで、学校の一部です。村には公共の建物はわずかしかなかった。多目的ホールは、教会と並んで最も大きな建物の一つです。単なるホールとして使える建物ではなく、フェスティバルホールのようにもしたかったのです。ここでは、演劇や音楽会も催されています。

ここに支持構造が見えます。上が主桁です。下が引っ張りベルトで、その引っ張り力によって構造が支えられています。5枚の板は、相互に釘で留めてあります。これらが支持システムを形成しています。この構造が形を生み出しました。つまり、構造が最初がありました。そして、窓をこの高さには持ってこられないことに気付きました。そうすると、上部で接続の問題が生ずることになります。そこで、窓を外側に配置したのです。

このような構造と形状の同時性は、私は建築家としてとても好きです。このホールは、地元の材料を使って、地元の職人が建てました。この事例で、村には小中学生はいなくなったけれど、村のホールは村民が引き続き喜んで利用していることがわかります。村民が学びの場として使いたい、使える場所になったということです。



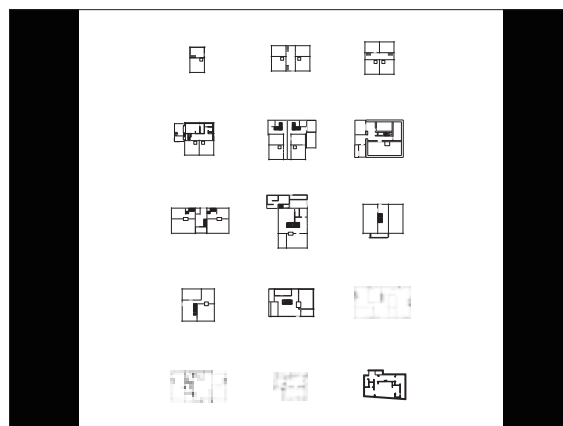
スライド24



スライド25



スライド26



スライド27

(スライド25, 26) ブロック建築は、フリンでは長いこと使ってきた構造です。この構造は、アルプス渓谷を越えて広く普及しておりますし、日本でも同じような構造様式があるということを見ました。

木製のはりが次々に積み重ねられて、お互いに支え合うように、コーナーで組み上げられています。しかし、この数十年間で、この木造建築は、新しい木造工法によって、ほとんど排除されてしまったかのようです。私たちは、この数年の間で、フリンに何軒かの建物を建てました。これは景観を維持するためではありません。ブロック建築は、フリンではそれ以上の意味を持っています。ブロック建築の周囲には、知識と文化が集結し、社会経済上の相互関係を濃密にし、そして、経済の中心地から遠く離れた生活にも貢献します。

(スライド27) このブロック建築の進化を見ていただけたと思います。最初の2部屋の家から、極めて複雑な構造までです。住宅が百年以上の間にどのように立てられていたか、つまり、フリンの住宅類型学は、研究によって、ブロック建築類型学に変わりました。ブロック建築類型類は、本来は材料の基本と構造の可能性によって研究します。

(スライド28) これがその種の住宅です。継ぎ目、角、隔壁がこのように組み合わせられているのがわかります。(スライド29) 別の住宅です。石を基礎とした家です。(スライド30) こちらは内部であります。梁が積み重ねられているのがわかると思います。(スライド31) 極めて均一的な印象を与えています。住宅の平面図です。



スライド28



スライド29



スライド30



スライド31

(スライド32) フリンの未来はどうなっていくのでしょうか。ここは山岳地域で、フリンも常に変化を続けております。私たちは可能な限り、この動きを制御して、偶然にだけ任せようと思っていないわけです。

私たちにとって重要なことは、人々を動機づけて、そして、働きかけることです。自らの運命を自ら引き受けるように、責任を持つようにと働きかけていければと思っております。社会の中で、一番よくないのは、無関心だと私は考えております。

(スライド33) これはフリンの高い山脈の景観で、海拔2,400メートルにあります。大変

テーマ6
フリンの未来

スライド32



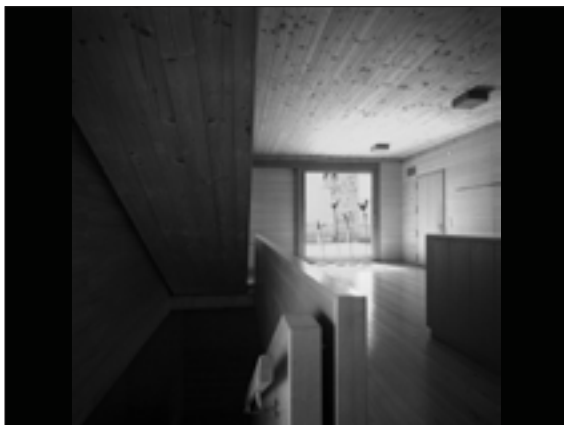
スライド33



スライド34



スライド35



スライド36



スライド37

すばらしい景観であります。無人の全く違う世界のようなのです。

(スライド34, 35) これは別の場所に建つ学校です。私が最初にコンペで受賞した作品で、1994年に建てられたものです。6学年ありまして、今、生徒数は大体10人から12人です。6学年が一つの空間の中で一緒に学んでいます。これで何の問題も生じていません。しばらくの間、「この原理、この方法、この種類の教育は使用できない」と言われてきました。子供は社会から非常に多くを学ぶという、子供の行動様式も見られます。それから横には教会も、そしてまた、公民館もありますね。大変美しい全体像だと思います。この校舎も、カラマツを使ったブロック建築です。

(スライド36) 階段とつながった廊下でありまして、3階建てです。(スライド37) これが学校の教室です。(スライド38, 39 奥の建物) 別の種類の教育施設である修道院です。ディセンティス修道院で、フリンから50km離れた場所にあります。今年創立1,400年を祝います。この修道院の中にギムナジウム、9年制の中等教育機関があります。この修道院、あるいは修道院附属学校は、地域における重要な機関であります。修道院附属学校と、農業用の修道院畜舎で構成されている、幾らか異なった教育場所というアイディアです。畜舎は、生産の場として農業の中心であるとともに、生徒にとっては特別な種類の教育と経験の場でもあります。生徒たちは農場に行き、生産物がどのようにしてつくられていくのかということを経験することができます。

(スライド39 手前の建物) こちらのスライドは、寄宿舍が付いた修道院です。これは女子用の寄宿舍です。修道院に暮らしながら、多数の若者が学校に通っております。女子だけではなく、男子もいます。この間、生徒たちは両親のもとを離れて生活しているわけです。

女子寮というのは、女子生徒のための第二の家となっております。生徒たちは、自分の部屋に一人でこもることもできるし、あるいはまた、共同生活を経験することもできます。

(スライド40) この二つのテーマは、私たちのデザインにとっては重要でした。これは5枚の平面図です。1階、2階から5階は女子生徒のための部屋です。中央には共同スペースがあり、女子生徒にとっての巣を作る目的があります。暗喩としての巣です。(スライ

テーマ7

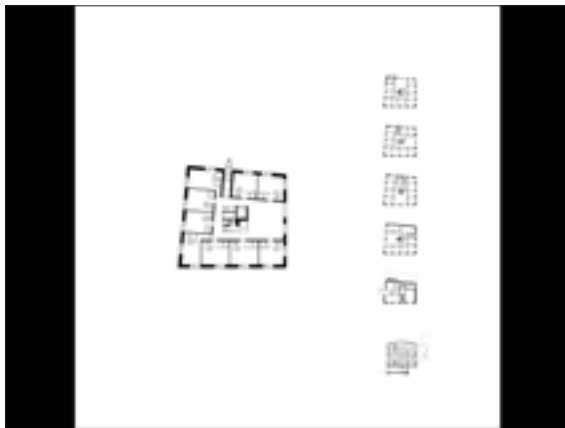
ディセンティス 修道院

スライド38



スライド39

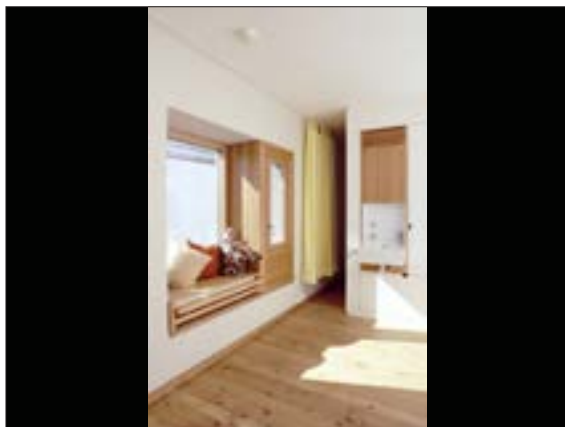
ド41) 女子生徒には個室が用意され、各部屋には机、ベッドがあります。各部屋に洗面所と、見えませんがトイレもあります。(スライド42) 各部屋には、出窓があります。ここに座ることもできます。その下に暖房装置があり、暖かくなります。その右側は、女子生徒のおしゃれや、身だしなみのための化粧ボックスです。(スライド43) また、各階の中央に階段室があり、各階を結びつけております。(スライド44) 階段室には、多目的ニッチが設けられていて、女子生徒がそこに座っておしゃべりをしているのが見えます。階段室の躯体はコンクリートでできていますが、大変ソフトなコンクリートになっております。



スライド40



スライド41



スライド42



スライド43



スライド44



スライド45

そういった意味でも、肌ざわりがいいです。

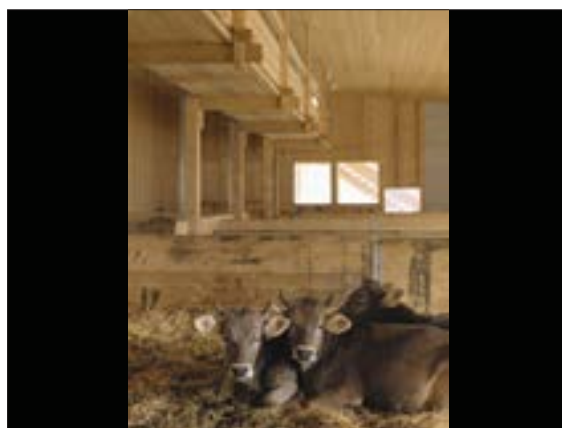
(スライド45) これが修道院附属農場で、ここも一部は教育の場です。私たちは、集中的な教育と経験を得られる場所にしようと思いました。この場所では、農業、その価値及び関連性に関して討論されます。ここでは小橋を渡ることができます。(スライド46) 動物がどのように草を食べるか、どのように動き回るかも実際に見ることができます。動物の邪魔はしません。畜舎全体に通路があります。(スライド47) これが牛です。

(スライド48, 49) そして、畜舎の横には、農業製品の製造所があります。ここでは、地域全体から集められた牛乳がチーズに加工されております。チーズは非常に特殊な部屋で熟成させます。私たちの課題は、設備を用いることなく、チーズが熟成する空間を作ることでした。(スライド50) そのために特殊な構造、アーチ構造を選択しました。チーズは、過激な空気流を嫌うので、空気は有機的に動く必要があります。ある形の空間は、空気は動きません。これは適していません。これを、アーチ構造で空気が停滞するのを防いでいます。

(スライド51) それでは、スイス連邦工科大学の教育を簡単に紹介したいと思います。私はここで教べんを執っております。ここで私たちは、プロジェクトを実施しております。そのプロジェクトの名前が「場所をつくる」というものです。目的は、学术界、経済界、政界、手工業、建築及びそのほかの関係者の間に対話を生むというものです。



スライド46



スライド47



スライド48



スライド49

「場所をつくる」というプロジェクトの基本的な考え方は、人生の最も重要で、最も決定的なことは、一目で見渡せる一つの空間、特異な空間の中で起こるということです。あらゆる恋愛関係は、特異な空間の中で起こります。これは、状況の変化には関わりなく起こります。そして、一目で見渡せる空間の中で、人間は動機づけを受け入れ、責任を担う能力を持つと思っています。

「場所をつくる」ということは、身近な領域を生み出すことを目指しています。我々は物事を把握し、プロセスを理解していきたいと思っています。そして、どのように物事が行われるかを知りたいと思っています。知覚能力を研ぎ澄ませたいと思っています。

「場所をつくる」というのは、多様性の破壊という行為に反対するプロジェクトです。この世界の中で様々な多様な文化があるということは素晴らしいと思います。文化は相違からしか生まれることができません。この相違がなければ、日本はスイスのようになり、スイスは日本ようになります。そうなりたくありません。私たちはこの相違が好きです、このプログラムは、実務と密接に関連しています。

私たちは、学生を教育するに当たって、方法論であるとか、イメージあるいは、スタイルなど、特定の種類の建築に関する知識を伝授しようとしておりません。そうではなく、生徒たちに対し、職業生活のための唯一のツールを伝授しようとしています。解決策を提示しないように注意しております。その中で、最も重要なことは、学生一人一人の自立



スライド50

テーマ8

スイス連邦工科大学 チューリヒ校における 教育と研究

スライド51



その他の農家

スライド52



窓

スライド53

性を強化することです。自主的な人間は、自立心は強いけれども、決して連帯心を失いません。それでは、最後に、授業課題の事例を紹介したいと思います。

(スライド52) 一つ目のテーマですが、「これまでとは異なる農業の在り方」というものでありました。農業は、大きな転換期にあります。農業の役割、その価値及びその存在をめぐる議論において、とりわけ経済性や自然保護が重要となってきます。

さらに、景観は文化という精神的所産の重要な貯蔵庫であることも、私たちは知っています。私たちは、経営方法をめぐる新たな方向性が「文化的景観」という概念に適合しているかどうかという問題に興味を持っています。私たちは、材料を慎重にかつそれを生かして扱う方法を示したいと思っています。

(スライド53) 次のテーマは「窓」です。現在では、建築における窓は、画像に格下げされることが多くなりました。つまり、眺望だけが重要だとされています。私たちは、「窓という画像」を「窓という場」にしたいと思っています。つまり、作業場所、生活の場、窓辺の生活です。窓という場は、住宅において最も美しい場所です。私たちにとって窓は、内と外との変わり目にある単なる薄膜以上のものなのです。眺望以上のものでなければなりません。

(スライド54) 次のテーマは、「観光」です。観光は、多くの地域における現実です。私たちは観光を否定しません。むしろ、観光とは文化の一部であり、地域を疲弊させる重荷ではなく、生活に貢献するものだとして認識しています。特にスイスにおいては、多くの村が観光用建物によって破壊されました。

(スライド55) 次のテーマは「設計」です。今日、建物の設計は、構造的に設計可能なのかどうかで決定されています。しかし、設計とは、材料とその特性によって決まってくるのです。まさにそこが大切だと思っています。材料の特性をベースにして設計を進めるべきだと思っています。そのためには、教育が必要です。材料は何ができるか、そして何ができないかを知る必要があります。そうでなければ、材料の特性を基にして設計はできないでしょう。

(スライド56) 最後の例は、「アデューラ」という領域です。これはフリンの上部にある



スライド54



スライド55

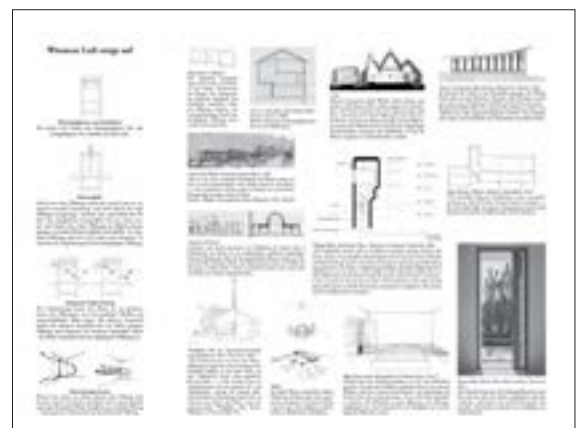
高地です。アデューラという一角を，スイス最大の自然公園にしようという計画があります。私たちは，人間と自然の関係を，一種の調和が生ずるように誘導しようとしています。と申しますのは，今，景観との付き合い方がかなり過激になっているようです。景観を理想化あるいは機械化，絶対的選択や推測。私たちは，利用と保護の間の調和を考えています。昔はそうであったのに，そこからはるかに離れてしまいました。啓蒙の時代以降，自然と文化が絶対的に分断されています。この分断をもう少し解きほぐす必要があります。これらが，学生による研究の一部です。

（スライド57）スイス連邦工科大学で私たちが行っている研究について短く紹介します。エネルギー，技術，自然法則との付き合いにおける建築の功績についてです。熱や湿気，空気の動き，光，響きなどの物理的な自然法則，及び，これらを空間でいかに具体化するかという知識は，建築家に必要な専門的能力だと思います。こういった能力は失われつつあるのではないのでしょうか。今では技術，設置された技術が全て行っています。私たちが制御する必要がなくなっています。

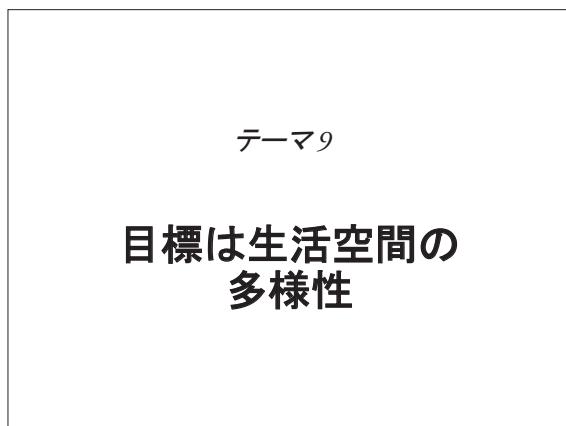
エネルギー問題を違う方法でも解決できることを証明したいのです。スイスにおきましては，福島原発事故の後，エネルギーシフトを行うことを決定しました。再生可能エネルギーに大きな期待がかけられています。これは大変素晴らしいことだと思います。しかし，その結果，住宅が，機械のようになってしまいました。省エネハウスは機械化の方向



スライド56



スライド57



スライド58



スライド59

に向かっています。感性的な側面は失われてしまいました。私は、住宅は機械ではないと言っています。

建築は、その基本的要素である形状や外形、配置、窓の開口部の位置及び大きさ、材料や構造によって、エネルギー問題に貢献することができると主張しています。私たちは、設置された技術をすばらしいものと考えています。高貴な補助物と考えています。本当は、設置された技術によって、有機体としての住宅の感覚性の表現を上昇させたいと考えています。これが、エネルギーとの付き合いについての私たちの考えです。どこでも同じに見える設置された技術も、多様性の破壊につながります。

(スライド58, 59) 今日、私の経験を報告させていただく機会を得ました。私は報告しただけで、何も主張していません。主張をしたら、その途端に私の主張というのは主観になってしまうので、結局、客観的なものでなくなってしまうわけです。正しいとか間違いとかの主張も同じです。正しいとか間違いは、行動の判断基準としては現実に対応することはできません。正しいとか間違いは、私たちの行動に「意義」のようなものとの関係で根拠づけるのに役立ちます。私たちは単純に知らなければなりません。生きることはイメージとアイディアです。個人にはそれぞれイメージがあり、正しくも間違ってもいません。イメージの質が重要です。

今日のシンポジウムのテーマは学校建築でしたが、私は意識的に、学校建築だけに絞って講演をしませんでした。というのは、全体像をつかむということが大変重要だと思っているからです。問題を提示するだけではなく、原因についても語るべきだと思うのです。さらに、これから何ができるかも考えることです。例えば、空いた学校で何ができるか。つまりスイスでは、今のところ、新しい校舎をどのように建てるかという問題ではなく、校舎で何ができるかが問題です。

私にとって重要なのは、能力としての知識と、情報としての知識は、基本的に違いがあることを示すことです。ガダマーは、「知識は、本来は情報とは正反対のものである」と言っています。

本日の意見交換によって、互いに得ることがあることを希望します。私自身については、この日本への旅行から多くを学ぶことができると確信しています。

御清聴ありがとうございました。

■ 司会

カミナダ教授、ありがとうございました。

講演

日本の地域を支え、 心をつなぐ 学校づくり



長澤 悟 氏

東洋大学名誉教授
国立教育政策研究所客員研究員

■司会 それでは、基調講演を再開させていただきます。

次に御講演いただく長澤悟東京大学名誉教授は、国立教育政策研究所客員研究員として、私どもへ学校施設が直面する様々な研究課題に指導、助言いただくとともに、平成26年3月に、学校施設の津波対策や避難所となる学校施設の在り方について取りまとめ報告した文部科学省の「災害に強い学校づくり検討部会」でも部会長を務めるなど、学校施設に関する文部科学省の各種有識者会議の主要メンバーとして活躍されています。

また、現在、石巻市や東松島市などで、東日本大震災の津波被害に遭った学校施設の復興支援に取り組まれています。

本日は、「地域を支え、心をつなぐ学校づくり」をテーマに講演をお願いします。

■長澤名誉教授 （スライド1）長澤でございます。今日はこのような場で、カミナダさんと一緒に講演をすることになるうとは、実は、5年前に先生の設計された、先ほどもちょっと出てきましたドゥビンの小学校を訪れたときには思いもよらないことでした。今日は、マウラー先生とも御一緒できることと併せて、大変うれしく、また、最初に感謝申し上げます。

本日の講演会は、「地域の核となる学校づくり」がメインタイトルとなっております。スイスの建築、スイスの学校の話を通して、日本の学校、あるいは、学校施設の在り方を考える機会にしたいということだと思っております。

今回のような講演会を国立教育政策研究所文教施設研究センターが企画、立案されるに至ったきっかけの一つとして、私がドゥビンの小学校を初めとして、スイスの学校について日本の学校の課題と照らしながら話したり、書いたりしてきたことに注目していただいたことも少しはあるかと思っております。

私自身のことで申しますと、40年間ほど学校建築について研究をし、また、日本各地の学校づくりに関わってきました。ドゥビンの小さな学校を訪れたときに、このような学校、また、学校建築がなぜ存在し得るのかということについて大変不思議に思い、それを通じて「学校とは何か」ということについて非常にたくさんの考えるヒントを頂いた気がいた



スライド1

しました。それは、この優れた建築が持つメディアとしての力を持ってじわじわと伝わってきたというふうに思っております。

個人的なことで大変恐縮ですが、私は大学院にいた頃から、日本建築学会の学校建築に関する委員会で、いろいろな研究に参加してまいりましたが、実は、最初のテーマは、文部科学省の委託による「小規模校の建築計画について」というものでした。

今振り返りますと、1953年に、当時の文部省は、「地域を壊すような無理な学校統合はしない」という通達を出しました。それを受けてのことだったのかなと今改めて思っております。

折しも、一昨日、中央教育審議会で「公立小中学校の適正規模、適正配置に関する手引」、その案が公表され、関連記事が各新聞の紙面を飾ったばかりであります。再び統合かという思いもいたしますが、それに対して、「学校とは何か」ということを改めてみんなで考えてみるいいチャンスというふうにも思っております。

さて、小規模校の調査研究では、当時、たくさんありました日本全国の複式学級学校もありました。冬季分校で、最初は夜になると家恋しくて、みんな子供たちがしくしく泣きだすとか、教員宿舎に朝採れたての野菜が投げ込まれているとか、先生方が少人数の指導に非常に意欲を燃やして工夫を重ねる姿、あるいは、そういった話にしばしば胸を熱くし、学校と地域の深い関わりについて実感することができました。これがその後、私自身、学校について考えたり、学校づくりに関わるときのベース、大きな財産になっております。

これまで全国で300余りの学校計画に私は関わってきましたが、実はその多くを占めるのが、小さな町や村、地域の小規模校です。人口200人、700人、1,000人の村、あるいは、2,000人、3,000人の町、あるいは、児童生徒数20人、60人、80人の学校、小中併設校、そういうものです。

小さな町や村、地域では、学校に寄せる地域の人々の思いの深さ、それを受けとめることができます。従来どおりの学校ではなくて、将来にわたって長く大事に使い続けていけることのできる学校づくり、そのために何をしておいたら良いのか、自分たちの思いを込められる学校づくりを進めたい、そういう願いを持つところの計画に関わってきたということになると思っております。

先生方とは目指す教育を、あるいは、地域の人々と地域の将来について話し合いを重ね、小さな学校をつくる。そういうところで、学校への思いは皆同じでした。それは、学校とは、地域にとっての学校だということです。

ドゥビンの学校の前に立って、その中に足を踏み入れたとき、その場所、それから、素朴な外観ながらき然と建つ姿、シンプルで品格がある内部空間、そういったものを通して、心にしみ入ってくるものを感じました。地域にとっての学校の姿というのがそこに一つ一つ現れてくる、それをひしひしと感じたわけです。

その前段に、実は、そのときスイスに行く前から、不思議な感じはしておりました。予定を組んでくれた、当時東洋大学におりました樋口貴彦さん、彼はカミナダ先生のもとで学んで、カミナダ先生を大変尊敬している人物ですが、彼から「学校から日曜日に来てほ

しいと言われている」というふうに聞いたのですね。そんなはずはないだろうというふうに思って出かけたわけですが、小さな集落に着きますと、村の人が現れて、かぎを開けて、中をうれしそうに案内してくれた。つまり、学校は村人のもの、村の人たちのものだということが、最初から伝わってまいりました。その後、そのときに考えたことを確かめたくて、翌年、もう一度、4年前、ドゥビン村のあるグラウビュンデン州の幾つかの学校を訪ねました。

今日はこの後、そこで見た学校を中心に、それらの学校を通じて考えていることについてお話しさせていただき、学校、それから、学校制度をめぐる今日の様々な我が国の動きの中で、特に小学校、中学校について、学校とは何か、地域の中での学校とは、そしてまた、学校建築、学校施設というものをそこでどう考えていけば良いのか、今日御参会の皆様と一緒にこれから考えていくきっかけになれば幸いと存じます。なお、今から御覧いただくスライドは、お手元の資料集と順序はほぼ同じですが、若干追加や修正をしておりますので、それを改めて御了解いただけたらと思います。

(スライド2) それでは、早速、スイスの旅に入りたいと思います。

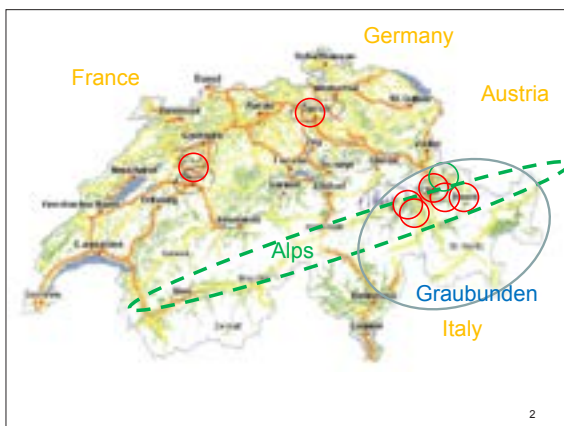
これがスイスの全体の図です。グラウビュンデン州は、スイスの、ここにアルプスがありますが、東南に当たります。チューリッヒがここです。

本日御紹介する学校は、今赤い丸のある辺りになります。マウラー先生とカミナダ先生からは、哲学的な、本質的なお話がありましたので、私はそれを受けて、少し実際の学校という場に結びつけて話を進めていけたらと思っております。

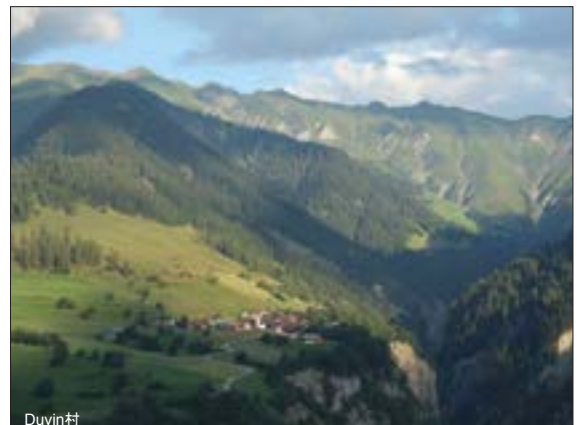
(スライド3) これが先ほどから申し上げているドゥビン村で、大変雄大な自然に囲まれた、標高約1,100メートル、人口は100人に満たないような小さな村です。

(スライド4) 大体、こういう急な谷の上に平らな場所があって、そこに集落が点在するわけですが、集落の一番中心になる場所に、教会と並んで、小学校があります。これは先ほどカミナダ先生のスライドにも出てまいりましたが、これが小学校、公民館、そして、コミュニティーセンター、教会が立ち並んでいます。

(スライド5) これが建物ですが、地下1階、木造3階建ての建物です。



スライド2



スライド3

(スライド6) その建物の中に入ってみますと、先ほど既に写真がありましたが、4階建てで、1階が運動スペースにもなる多目的ホール、教室、特別教室、階段室のエリアに玄関ホール、図書コーナー、談話コーナーがあります。

最初に感じたのが、これは1階玄関ホールに入ったところですが、その奥にクローゼットがあり、クローゼットの中を開けるとキッチンが出てきます。本当にそうなのか、後にカミナダさんにお聞きしないといけないのですが。

この学校は、子供たちの場所というだけではなくて、地域の人たちのサロンとしての役割を果たしているのではないかと。それを受けとめるきちんと設備的な用意もされている。そういった学校の地域の中における在り方と、それに応える施設というのが印象に残りました。

(スライド7) これが教室の内部です。1年生から6年生までの児童、全校1学級の、言ってみれば超複式校ですね。子供の数は、行ったときには18人、20人ぐらいいました。ですが、最近は9人ぐらいになっているという話もありますし、7人以上いれば学校は存続できるということがどうもあるようですから、割と厳しい状況にあるということが言えるかもしれません。

(スライド8) もう一つ、学校を反対側から見たところですが、集落を受けとめる位置に公民館と教会があり、それを回り込んでいくと小学校がこう建っているということです。



スライド4



スライド5



スライド6



スライド7

この校舎の写真を見て、皆さんどうお感じになるかですが、大変素朴ですが、実は非常に訴えかけてくる力が強いのです。

(スライド9) 次の学校に移ります。次は、経済会議で有名なダボスにある学校です。

(スライド10) これはダボスの小学校、フラエンキルヒという小学校です。子供の数は17人、全校ですね。1年から3年生までの1クラスと、4年生から6年生までの1クラス、合計2クラスです。

それぞれのクラスには、担任の先生と補助教員がつきます。それから、技術系の教育、いわゆる専科の教育については、何校か掛け持ちの先生がいて指導をします。

この学校の校長先生は、四つの学校の校長を兼任しています。つまり、生徒があつて学校というのではなくて、その学校を存続するために、どういうふうに弾力的、機動的に学校を組織していくかということで、学校を維持しているというような感じがいたします。

実は、この学校ができたのは1935年、80年前になります。ですけれども、全くそれは感じさせないというか、もちろんそれにはきちんとした手入れをしているというか、改修をしているということです。

(スライド11) これはエントランスで、ここにはエルンスト・キルヒナー、このグラウビュンデンの自然をテーマに風景画等を書いている地域の芸術家ですが、その芸術家の彫刻作品が置かれています。これ一つ取っても、この学校が地域のみんなのものだというこ



スライド 8



スライド 9



スライド10



スライド11

とが伝わってまいります。

(スライド12) 教室の内部ですね、先ほどの大屋根の両側に教室があって、最上階はコンピューター等々があります。小さな規模の学校ですが、どの学校にも技術室、工作室というのはきちんと備えている。つまり、学校とは何か、あるいは、この学校を地域の中で維持することの意義は何かということ、それは地域の中で生きる技術をきちんと身につける、それが学校の役割である。農具なり家具なり、そういうものの補修は自力でできるぐらいの力はきちんと身につけています。

教室は、複式の学校ですが、過ごし方の違いに応じて小さなコーナーが取られて、あるいは、収納家具が用意されていて、大変居心地のいい環境が先生方の手で構成されているということですね。

(スライド13) これは教員室です。(スライド14) それから、これは運動場ですね。

それから、上の方から校舎を見たところ。つまり、周りの民家、構成する景観の中に学校も溶け込んでいる。それは、形態であったり、材料であったり、スケールであったり。これも一つのコンセプトということになると思います。

学校は学校として、違うタイプの建物としてつくるというのも一つの考え方でしょうし、学校は地域の中のものだということです。

(スライド15) 更にまた、鉄道に乗って、今度は、サントペーターという、やはり小



スライド12



スライド13



スライド14



スライド15

さな村に移ります。

(スライド16) これは、下に街道が通っていますが、上から見おろした。ここが新しく建った小学校です。ここにあるのは役場、あるいは、郵便局、これは元の学校の校舎です。それから、右の外れたところに教会があります。ここを村の人たちの集落を受けとめる位置にある、村の人たちの精神的、あるいは、活動的にも中心となる場として想定されている。

(スライド17) 斜面に建っているわけですが、街道があり、人工地盤をつくって、旧校舎の役場と、それから、新しく建った体育館と、新しい校舎がある。階段を上がって行って、役場、体育館、奥に小学校という構成になります。

(スライド18) これは午前10時頃の写真です。教室では子供たちが一生懸命勉強している。でも、ホールの方ではお母さんたちがエアロビクスで健康的な活動をしているということです。つまり、この学校は、子供たちの教育の場というだけではなくて、村の人たちみんなの活動の場であり、集まりの場である。それを一緒に使うということとはごく当たり前の話だということですね。

これはちょっとタイムテーブルで見えないと思いますが、小学校の1年生です。

この学校は実は、周辺六つの集落と一緒に学校を持っていて、周辺六つの集落の子供たちの3、4年生を引き受ける学校です。3、4年生が14人、それが2クラスに分かれて勉強しているということですね。ほかの学年の子は、ほかの集落にあるそれぞれの学校に通っ



スライド16



スライド17



スライド18



スライド19

ているというわけです。

タイムテーブルの話に戻りますと、1クラスが週2コマ分最初から固定され、もう1クラスが固定され、周囲の音楽学校、周囲の中学校が使う時間が固定されていて、言ってみれば、それ以外の時間は、人が自由に使えるということになります。

(スライド19) 斜面型の学校ですが、バリアフリーの対応がされている。

(スライド20) これが教室の内部ですね。大変、木でくるまれ、大きなガラス窓のあるとても居心地のいい空間であるということと、それから、繰り返しですが、先生方の手によって大変教育環境、生活環境として整えられています。それを支えているのが、教室の中にある用意された収納家具ということになります。日本の学校は壁で囲まれた空間ですが、スイスの学校は、生活を支える要素として、様々な収納が最初から建築と一緒につくられています。

(スライド21) 以上、スイスの学校を見ていただきました。それを整理しますと、学校は地域の中心である、学校は地域の将来の担い手を育てる場だ、地域の空間で生きる技術を育てるんだ、村の人が案内してくれた、地域立の学校と言ってもいいようなものです。

一方で、地域の学校を維持する考え方と工夫、特に小規模複式の学校をどういうふうに運営していくか、成立させていくか、人事的なことも含めてですね。それから、コンパクトな施設。どの学校も 500平米、600平米、1,000平米、必要な機能は抑え、人数に応じたコンパクトな構成をしているということです。でも一方、技術室とか、そういう部屋は、「教育とは何か」ということできちんと押さえています。それから、今御覧いただいたのは、全部小学校でした。小学校は、とにかく地域からなくさないでおうと。

でも、中学校はもう少し集団的な活動とか、いろいろな活動があり、それから、社会性も出てくるということで、中学生は少し離れたところに人数の多い学校をつくるということです。ですから、今、小中一貫教育に対応した施設の在り方ということも大きな課題になっています。それは、小中一体につくるということで、小中一貫教育をスムーズにできるようにするというのも一つの選択肢です。

一方で、小と中の違いを考えながら、地域における小学校、要するに、人生の最初の時



スライド20

まとめ 1

- 学校は地域の中心
- 学校は地域の将来の担い手を育てる
- 地域の空間で生きる技術を伝える
- 「地域立学校」
- 地域の学校を維持する考え方と工夫
- 小規模複式学級 規模と教育効果・教育機会
- コンパクトな施設
- 機動的な教員配置
- 小学校と中学校の違い 小中一貫と小中一体型校舎
- コミュニティ施設との複合
- 学校施設に人事学校の標準規模と教育効果
- 複合化
- 小規模校
- 学校の標準規模 適正規模

21

スライド21

期に地域の良を十分感じ取って育った経験というのを持たせたい。そこに地域の人から一緒になって子供たちの成長に関わっていこうというときに、小と中は性格の違いに応じて分けていくという考え方もあります。大事なのは、どちらがというのではなくて、それを一つ一つの学校づくりの中で議論して決めていくということが大事なのではないのでしょうか。

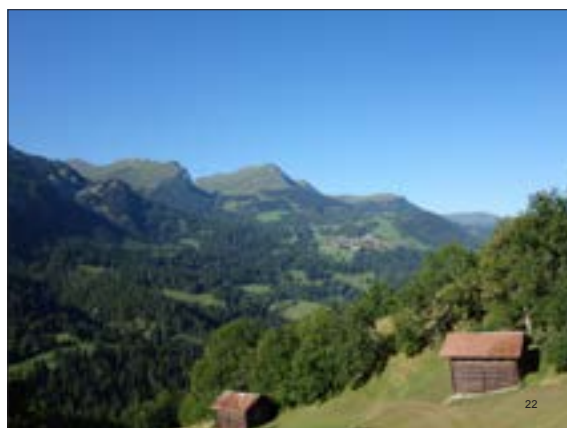
（スライド22）コミュニティー施設との複合等です。そういうまとめを一旦したところで、日本の学校に戻ってみたいと思います。

（スライド23）これは、1990年ぐらいに私自身が計画に関わった、人口700人の村の学校です。この学校は、小学校と中学校が一緒ですが、全部合わせて学校と呼ぶことにしましょう。

小学校と、ここに鳥居があって、階段を上っていくと神社があります。この手前に実は役場が合って、役場と宗教の場と学校があるという取り合わせは、先ほどのスイスと似ています。

（スライド24）小学校と中学校があって、共用のスペースがあります。そこに野外劇場、図書館、ランチルーム、音楽、郷土資料室、体育館、それから、美術、技術教室があります。

それを結ぶ学校の中にこういう道をつくって、道の手前に役場があり、こちらに保育所があり、反対側にはコミュニティーセンター、高齢者のセンターがある。ここ一角が村の、



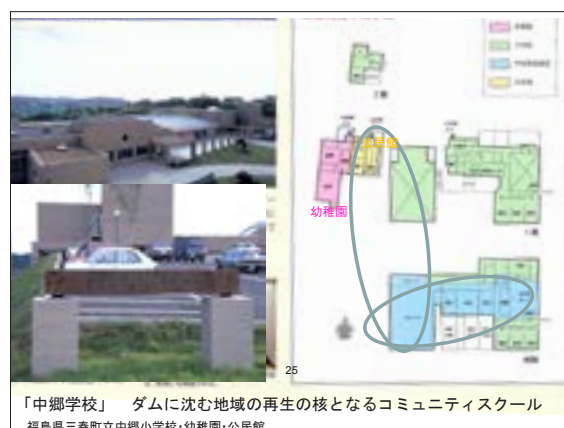
スライド22



スライド23



スライド24



スライド25

高校と大学の時期は中抜けしますが、あとは村の人たちの活動の場、育つ場としての学校づくりということをいたします。

(スライド25) これは、ダムに沈む小学校で、その建設に賛成する地域の人たちの最後の条件は、小学校と幼稚園と公民館を一緒につくってほしい、それを新たな地域づくりの核にしていくのだ。

先ほど、小中、地域の中心として、浪合村の浪合学校という呼び方をしたのだと言いましたが、いいアイデアをまねするのは、私たちは躊躇（ちゅうちょ）しませんということで、これは中郷という地域ですが、中郷学校という、これ全体を学校と呼ぶことにしようということになったものです。そこに地域の人が使うスペースがあります。

(スライド26) これは人口1,000人の村の学校ですが、これも地域と学校が一緒に使う施設です。これは学校ではなくて、「アーパス」という名前を中学生がつけてくれました。それは、All Persons' Schoolの頭文字ということだったわけですね。大人たちが話を繰り返して目指した精神というのを、中学生が名前にしてくれたということで、大変喜んだということがございました。

(スライド27) これは人口200人の村の小中学校です。道路を挟んだところに村の中心施設が固まっているので、特別教室、図書館、食堂、それはそちらにつくろう。それがまた地域のセンターとなるように、そういう計画をしたものです。



スライド26



スライド27



スライド28



スライド29

(スライド28) これは図書館を1階、2階に中学生の図書館を置く。休みの日にも学校に来て、子供たちが生活できるようにと計画したものです。つまり、学校と地域との関わり、あるいは、地域の人たちが参加した学校づくりというのは、みんなそれぞれの地域の特性に応じて、その地域としての形をつくり上げてきたということですね。

(スライド29) これは青森県の、今は合併されてしまった町ですが、町民の念願は、ホールと図書館が欲しい、それを単独で建設するのは不可能だということで、中学校を建設する機会が最後のチャンスだということで、みんなで頑張って、こういった学校をつくり上げたものです。(スライド30) そこでは、郷土の芸能を地域の人たちが中学生に教えて、そこで子供たちが皆さんに披露する、そういう晴れの舞台にもなっております。

そういう地域と学校が一体になった学校づくり、地域の間でもある学校については、それをどう運営するかということがもう一つ大きな課題にあります。

(スライド31) これは新潟県の学校ですが、地域交流と、地域開放がされる特別教室群がここにまとめられておりますが、その一角に町民ホームベースという、地域の人たちがいつもいられる場所がつくられています。これは、計画に多くの人たちが参加して学校づくりを進めたのですが、その人たちの集まりが、学校ができたらなくなってしまうというのはもったいない、学校ができた後は学校を維持する役割をみんなで果たしていこう。そのグループの名前を「みらいのたね」というふうにつけて、今でも、外側には中学生が通



スライド30



スライド31



スライド32

地域の核となる学校づくり

- ・小規模校の計画
学校は地域のコミュニティセンター
学びの活性化（新しい学校システムの構築）
- ・学校開放からコミュニティスクールへ
生涯学習、交流拠点、学校支援、
- ・地域の安全安心を支える防災拠点
- ・複合ではなく、その地域ならではの施設の形、名称
「〇〇町・学びの駅」
- ・持続可能な地域づくり
学校施設の計画時は、時間を出し合って
地域づくりを考える最大のチャンス
- ・里山資本主義：学校+木+エネルギー（木質バイオマス）

スライド33

りますから、この場所が地域の人と中学生の交流の場にもなっているということです。

(スライド32,33)そういう地域の核となる学校,小規模な学校,コミュニティースクール,それから,地域の安全,安心を支える防災の場,そういったものにはやはり新しい名前を用意していく。そういう新しい名前を持った施設が地域を支えていく。そういう地域と学校との連携を,どういうふうに地域の特性に応じてつくり上げていくかということが,今課題としてあることだというふうに思っています。

(スライド34) そのときのテーマとしては,生きがいづくりとか,交流の場であるとか,防災,それから,地域の人たちが集まる地域づくりでした。

もう一つは,地域の人たちが学校の活動を支援する,そういう仕組みを建物と併せてつくり上げる機会というのが,学校づくり,学校施設をつくるきっかけだというふうに考えていくことが大事だというふうに思うわけです。

(スライド35) その一方で,学校統廃合が進んでいます。この学校も今,廃校になってしまっているわけですが,(スライド36) 文部科学省の調査ですが,毎年400校ぐらいずつ統合が進んでいます。

(スライド37) これは学校のクラス数別の学校数の表ですが,1991年には小学校でいうと全校6学級,1学年1クラスの学校が圧倒的に多かった。ですけれども,2014年になると,それは半分に減っているといえますか,これが統合の言ってみれば結果といえますか,成

地域の核となる学校づくり

地域を支える学校、地域が支える学校

生きがい

- ・ 学校開放:遊び場、運動の場、青少年の居場所
- ・ 複合化・インテリジェント化:生涯学習、学社連携・学地連携・学社融合

交流

- ・ 世代間交流の場、地域づくりの拠点
- ・ 地域の活動拠点となる学校:保護者・地域住民のサロン、親父の会

学校防災・地域防災

- ・ 地域の防災拠点—安全、避難経路
- ・ 災害時の避難場所—備蓄、情報

地域づくり

- ・ 安心して住める地域づくり:居住環境整備—高齢者・子育て支援、教育支援
- ・ 地域を守り育てる木の学校:地産地消→地材地建

学校支援

- ・ 地域の教育力を生かす:総合学習、ゲストティーチャー、地域空間
- ・ 地域の学校運営参加:学校評議員、コミュニティスクール
- ・ 地域ぐるみの教育:小中一貫教育
- ・ 子どもの安全は地域が守る:人の目で守る、通学路の安全

スライド34

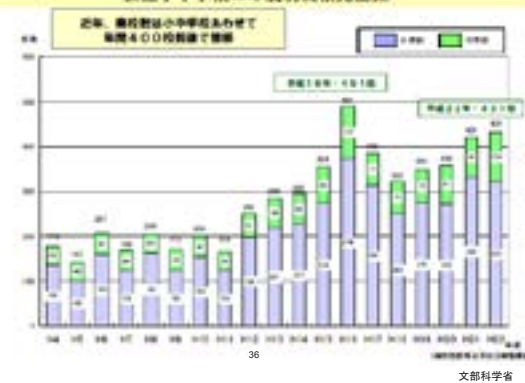
学校統廃合について

- ・ 学校統合新基準策定の動き
- ・ 人口急減社会(日本創生会議)
消滅可能性都市896? 人口1万人以下523 (29.1%)
- ・ 廃校数—20年間で6800校超



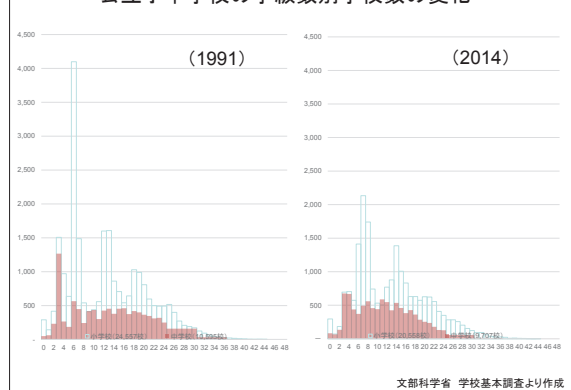
スライド35

公立小中学校の年度別廃校発生数



スライド36

公立小中学校の学級数別学校数の変化



スライド37

果といいますか、そういうものになります。

(スライド38, 39) こういう中で、今まで見ていただいたような、地域と学校との関わりというのをどういうふうに考えていくかということが、今、問われているのではないかと、いうふうに思うわけです。

(スライド40) それで、学校施設の課題ということについて、やはりスイスと日本の学校の課題を比べながら、少し考えてみたいと思います。

三つほどテーマを絞って御紹介したいと思います。

一つは、「木の学校づくり」ということです。これはドゥビンの小学校で、これは隣にある村役場が、伝統的な工法を現代的にまたデザインの的に生かしているということがわかります。

これはもう一つ、御覧いただきましたサントペーターの学校で、これは校倉の組み方が少し違います。つまり、その地域それぞれの木造、あるいは、木の使い方、それが生かされながら、地域の学校としての姿を持ち、それが地域の人たちの喜びにつながるような学校をつくっています。それをもう一回一言で言うと、木造でつくるのが当たり前だから、地域にある材料は木であって、それをつくる伝統的な技術もあり、木造が当たり前だから木造でつくるということです。今、木造の建物がつくりやすい仕組みというのをどうつくっていくかというのは、我が国では課題になっていますが、このくらいの状況になるとい

廃校問題：「学校は地域の核」との矛盾

- ・学校統合を進めようとする動き
- ・適正規模論を乗り越えて過疎地の小規模小学校を守る
- ・学校とは何か
- ・教育の目標とは何か
- ・学校観、教育観を確かめ直す
地域の文化をつなぎ、地域の力で将来の担い手を育てる場
- ・教育論と共に学校論を
- ・廃校問題－「地域の核をなくす」？
教育論だけでなく学校論を＝適正規模とは
小中一貫教育と小中一体型施設 小学校と中学校の違い
- ・統合校を核とした新たな地域づくりと、
廃校となった地域の新たなプラットフォームづくり

38

スライド38



スライド39



スライド40



スライド41

いなというふうに思うわけです。

(スライド41) 一方、これは内部ですが、大変端正な、一つ特色を言えば、マッシブな木の使い方というかですね。日本の木造建築は、柱、はりの軸組み工法ですが、ヨーロッパでは、軸組み工法は木を節約する貧しい工法だというような言い方もあって、それはともかく、木の使い方それぞれの伝統文化があるということだというふうに思います。

(スライド42, 43) でも、学校については、様々な取組の成果が出、今、木造の建物が2割、内装に使うのは5割で、合わせて75%は木を活用するということで、様々な地域材を生かした工法がつくられていっております。

(スライド44-58) そういう学校づくりというのは、地域の力を挙げて取り組む。地域の人たちがたくさんの方が関わるということが、またその学校を地域に根づかせていく力にもなるだろうと思うわけです。そういう力を逆に言うと、木の学校、木の建築は持っているということだと思います。その力を是非発揮できるような木の学校づくりを進めていきたいものです。これも一貫した学校づくりということで、新築の学校、それから、改修をした学校、小さい学校は木造で。これも、一つ目標を立てて一貫して取り組むことで、地域の力が結集される。そういう学校づくりにつながるということです。

(スライド59) 二つ目は、老朽化対策ということで、我が国では25年以上経過の建物が7割を占めて、その改修をどう進めていくかというのが大きな課題だと言われています。


木の学校づくり

木材活用の意義

- 健康・快適な環境
- 山林の保全
- 地域の景観
- 地域の技術・文化の継承
- 温暖化対策-CO2の固定化

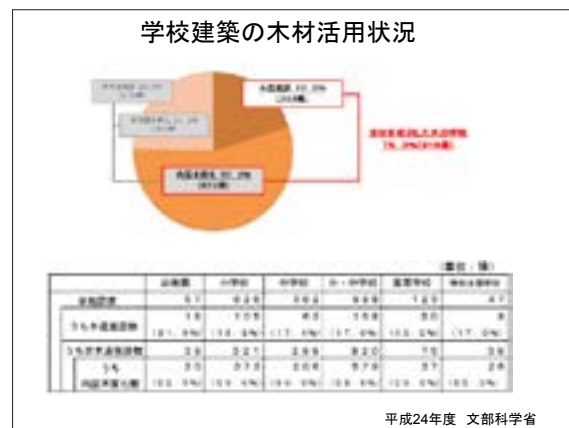
伐る一植える一育てる
↑
使う……地域材
地域の力、地域の協力
物語が残る木の学校づくり

木の建築を作りやすい社会システムの構築：川上一川中—川下
・学校が造ればなんでも溢れる



日光市立轟小学校 1987年

スライド42



スライド43



スライド44



スライド45



スライド46



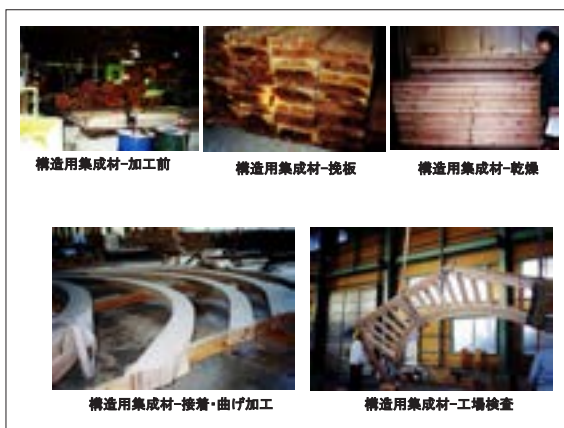
スライド47



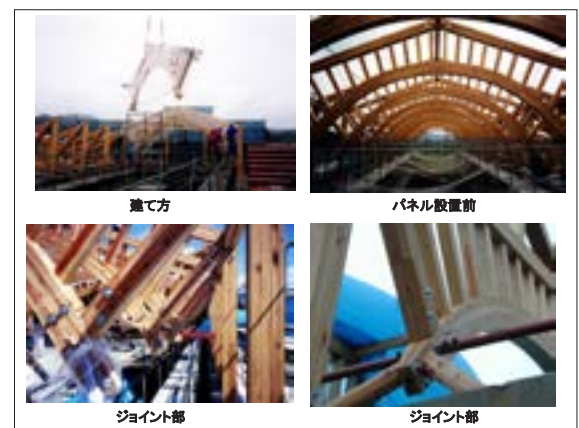
スライド48



スライド49



スライド50



スライド51



スライド52



スライド53

文部科学省では、学校施設の老朽化対策について、報告書をまとめましたが、その前書き、第1行に、学校は新たな危機に瀕（ひん）している。老朽化という大きな波がやってくるという危機というふうにあります。きちんと対応していかなければいけないのですが。

(スライド60) ただ、今日この場でスイスの建築家の前でお話するのが少しはばかられる。30年で老朽化？という感じです。30年というのはまだたったばかりじゃないか。逆にそれは、いかにつくりっぱなしだったかということで、そのことを我々はもう一回この機会に、ちゃんと傷んだところに手を入れていくのと同時に、考え直してみる必要があります。

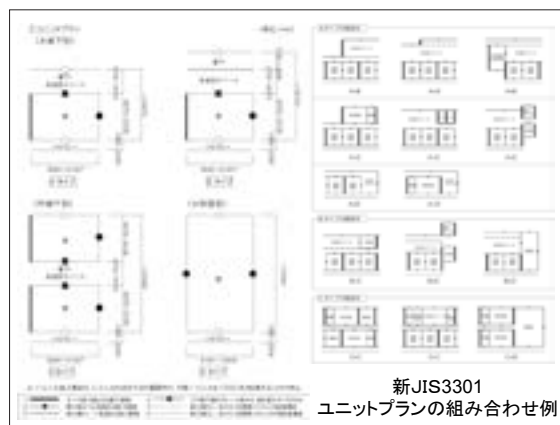
改正JIS A 3301 に規定する木造校舎

- ・ **ユニット(単位教室部分)について規定する。**
 - ・ ユニットの組合せによる建築物は、耐火建築物及び準耐火建築物に該当しない
木造校舎を対象とする。
 - ・ 平屋及び2階建ての木造校舎を対象とする。
- ＜平面計画・断面計画＞
- ・ **ユニットの平面形は、室と廊下・多目的スペースの組合せにより
片廊下型、多目的スペース付廊下型、中廊下型、大部屋型とする。**
- 様々な大きさに対応できるよう、一定の幅のある寸法体系を用意し、その組合せにより
様々な空間構成が実現可能なものとする。



ユニットの平面形のイメージ 文部科学省

スライド54



スライド55



スライド56



スライド57



スライド58



スライド59

ます。

もう一つは、いかに長寿命化していくか。長寿命化するためには、今新しく学校をつくるときの課題をきちんと受けとめて、それを改修するときにも全部課題として、それを反映した施設づくりをしなければいけないことだというふうに思います。

（スライド61）幾つか改修をした、これは耐震補強と間伐材の活用で改修をした例。これも同じように、標準型の校舎を、内装を木質化して改修した例ですね。

（スライド62-65）こういういろいろな取組がありますが、長寿命化というのは、やはり、

**老朽化対策ではなく長寿命化改修
サステナブルな学校づくり**


30年で老朽化というのは早すぎる
→老朽化対策ではなく、現代化、長寿命化
→レトロフィット

1. 安全・安心な施設環境の確保
2. 教育機能の質的向上、地域の将来の担い手育て
3. 地域の核となる学校づくり／防災機能の強化
4. 室内環境の質的向上とエコスクール化
5. 温かみと潤いのある木の学校づくり

膨大な量と財政の逼迫
地域が必要とする機能は保持しつつ、
施設総量を減らす
→学校を核とした公共施設の適正配置

適時、適切な維持管理を常識とする
予防保全

日経アーキテクチャー 60



スライド60



スライド61



スライド62



スライド63



スライド64



スライド65

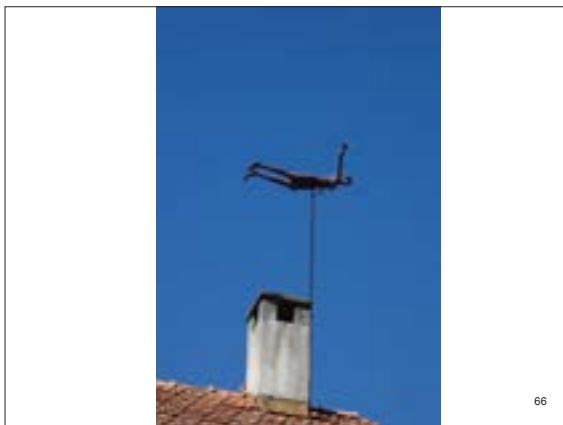
目に見えてよくなったと思える要素をちゃんと入れていくということが大事で、そのためには、長寿命化に併せて機能改善を行うなど、非常に力のいる取組だと思います。

(スライド66) ここでまた、スイスに飛んで戻ることになります。(スライド67) これは、先ほど、マウラーさんのお話の中に出てきた学校で、オルジャッティの設計した学校、パスペルスという学校です。実はこれが新しい校舎、向かいに古い校舎があります。この建物を建てるときに、実は地下にトンネルをつくって、地下で二つが繋がっています。

(スライド68) 先ほどのコンクリートの階段室。(スライド69) 一転して、教室に入ると、木を重ねた大変居心地のいい空間になっています。

(スライド70) この学校も、コンピューター、あるいは、技術、手工芸、そういった手の技を身につけるための特別教室は充実しています。これは旧校舎に小学生が50人ぐらい、1・2年、3・4年、5・6年の2学年複式の3クラス、中学校は20人ぐらいで、新しい校舎で生活しております。

(スライド71) このトンネルをくぐっていくと、これが旧校舎の入り口です。この校舎はちょっと年数を確かめていませんが、かなり年数がたっているはずですが、見た目にも大変居心地が良いです。これが小学校の全景ですが、きちんと手を入れていくというのが当たり前。言ってみれば、毎年の新入生を新しくきれいになった建物で迎えるというのが基本的姿勢です。20年たって、そこまでは傷み切って、そこで手を入れて、きれいにな



スライド66



スライド67



スライド68



スライド69

るというのではなくて、常にきれいさをどう保つか。それには、事後保全ではなくて、予防保全の考え方をきちんと定着させていくというのが課題です。

(スライド72) これは、旧校舎の特別教室ゾーンですね。均衡の部屋があり、これは運動のスペースです。こういう写真を見ても、その地域で生きる力、技というのを身につけてもらう。その子供たちがやがて地域を支える力になる、人材になるということだと思います。

(スライド73) これもマウラーさんの話と関係があって、実は、パスペルスの図を探し



技術教育施設の充1実
Paspels小学校

スライド70



地下道を通じて
既存校舎へ
Paspels小学校

スライド71



改修校舎
Paspels小学校

スライド72



Volleges 小学校

スライド73



Volleges 小学校

スライド74



役場、保育園との複合 Mastris小学校, Igis
1,870㎡ 1995, Jungling und Hagman

スライド75

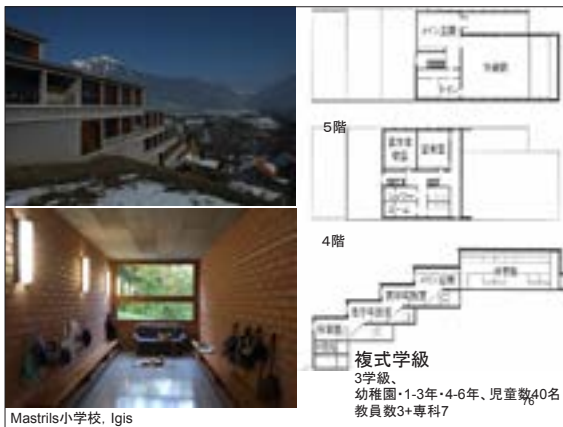
ていて、一瞬ちょっと間違えてコピーをしました。でも、これは私が行っていない学校だということに気が付いたのですが、プランが似ているということですね。

(スライド74) この次の時代の、この空間が木で居心地の良い居場所になっているというのが、先ほどの新しい学校だったということになります。

(スライド75,76) 斜面を生かすということで、この学校は、役場と、保育園と、低学年、高学年、ホールというのが一体になった斜面型の建物ですね。正面の窓から向かいの町、あるいは、山が見えます。

(スライド77-79) あとは、いろんな取組ということですが、これはベルンの近くにある木造に関する工業高専とって、木造4階建てができたということですが、その木造4階建てを成立させるためには、木は特に外に使うと傷みますので、足場をかけないで、中から傷んだところを取りかえられるような工法というのを併せて考えることで実現したというふうに言われています。

(スライド80) これはチューリッヒの近くのデーティコンという州の学校です。(スライド81) 今までずっと複式の学校を御覧いただいていたので、これは通常の1学年1クラスの学校で、教室のわきにちょっと小さな場所があって、グループ活動とか、様々な活動に対応できるような教室の前面とか、そういう設備も整っているわけです。これも先ほどの木造の校舎を思い出していただくと、実は教室回りの設備というのは、この学校に引



スライド76



スライド77



スライド78



スライド79



スライド80



スライド81



スライド82



スライド83

木質バイオマス

基本的な考え方

- ・ エネルギー自給 石油代を地域で回す
- ・ 規模の適正化を図る
- ・ 排熱利用を進める
- ・ 残材利用を促す
- ・ カスケード利用
 - 林業資本が現地でチップ生産
 - 建材・資材利用を優先し、利用できない部分をバイオマス利用する「段階的利用」

条件

- ① 木材調達
- ② 熱需要
 - ・ 地域ごとに最適なスケール
 - ・ 事業者として製材工場等の木材産業

スライド84

Ludesch

- ・ Low-High instead of installation
- ・ Biomass – heating network with woodchips
- ・ Passive cooling with groundwater
- ・ Daylight use
- ・ Buildings with control
- ・ PV system (roofing of the centreplace)
- ・ Solar hot water

スライド85



スライド86

持続可能な地域づくりとエネルギー

- ・ 地域と木質バイオマスを繋ぐことによる自立的な地域づくり
- ・ 小集落単位の熱利用のバイオマス 災害時にもエネルギーが途絶えない
- ・ 外に払っていたエネルギー代を地域で生かす
- ・ * 技術開発を促す制度設計が必要

スライド87

けを取らないといえますか、ちゃんと新しくなっていた。それが常に手を入れるということの本来の意義だというふうに思うわけです。

（スライド82）これはこの学校の旧校舎です。旧校舎は内部が改修されて、これも収納がかなりたっぷり取られています。

（スライド83-87）この学校の熱源は、木材のチップです。要するに、木質バイオマスです。今、自立的な地域づくりということが課題です。自立的な地域をつくる時には、地域の人たちの活動、あるいは、精神的な中心をどうつくるかということと、教育と、それから、エネルギー、どこにでもある循環材料である木をどう使うかということ、木質バイオマスというのをきちんと考えていくことがテーマになるだろうと思っています。

（スライド88, 89）それから、エコスクールですね。地球環境に配慮した学校づくりというのも三つ目の大きな課題です。

（スライド90）実は、私が初めてスイスに行ったとき見た学校の一つがこれで、当時日本ではエコスクールの取組を始めたばかりでしたが、その当時、パッシブソーラー、あるいは、ビオトープづくり、環境配慮の学校を積極的に取り組んでいるというのが大変印象的でした。

（スライド91）まとめますと、地域の安全、安心を支える、生きがいをつくる、まとまりをつくる、改めて学校は地域の核であるということをとらえ直す。その中から新しい学

ゼロエネルギー学校

- ・ エコスクール：地球環境配慮ー
対地球温暖化・低炭素化
ゼロエネルギー化
- ・ 必要なエネルギーは使う
ストレスのない室内環境
情報化
地域利用
- ・ むだはなくす
省エネルギー、高効率設備、自然力、新しい形
地域・場所の気候
- ・ 新エネルギー活用：太陽光発電、太陽熱利用、高効率設備
- ・ 非常時対応

スライド88

エコスクール化の推進

文部科学省

スライド89

エコスクール
・パッシブソーラー
・ビオトープ
Schulhaus Gumpenwiesen, Dielsdorf

スライド90

まとめ 2

- ・ 学校は地域の安全・安心を支える
- ・ 学校は地域の生きがいを作る
- ・ 学校は地域のまとまりを作る
- ・ 学校は精神的にも活動面でも地域の核である
- ・ 学校は持続可能な地域づくりの核となる
- ・ 木、エネルギー
- ・ 学校統合するということはどういうことか
- ・ 学校を維持する工夫
- ・ 新たな地域のプラットフォームづくり

学校とは、学校教育とは

スライド91

校像をつくり上げていくという課題に私たちは直面しているということが言えるのではないかと思います。

(スライド92) 時間が来ておりますので、最後、17日は阪神淡路から20年というのがございましたが、東日本大震災からの学校の復興、特に、津波で被害を受けた学校の復興というのはまだ途上で、完成したものはほとんどないと言っていいでしょう。これは新聞の記事ですが、新聞の記事で初めて笑顔が写真に登場したという印象を私自身が持ったのがこの写真です。その写真が、学校を再開する、新しい学校に向かう子供の顔だったというのが大変印象的でした。

(スライド93) 取組をちょっとだけ御紹介しますと、湾の両側が津波で被害を受けた。この二つの小学校、中学校です。(スライド94) これは1年半ほどたった段階ですが、この校舎は3階まで水に浸(つ)かったわけですが、新しくここを造成して、そこに建てるということです。

(スライド95,96) 地域の人たちの思いは、とにかく安全と、とにかく早くしてくれれば、それだけしか言うことは無い、あとはとにかく作ってくれ。でも、そのときに、今日ずっとお話しさせていただいた、こういった今の学校の課題をどうとらえていくか。

復興においても、改修においても、新しく作る場合においても、常に学校の課題というのを大きくとらえながら議論を重ね、その実現を図っていくことが、今、学校づくりで



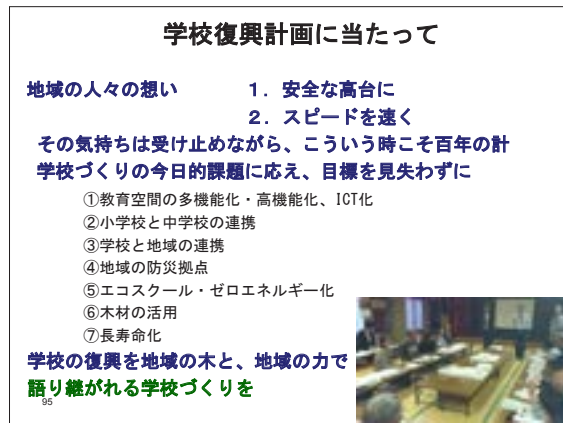
スライド92



スライド93



スライド94



スライド95

大事なことだと思います。実は設計はでき上がって、29年4月開校の予定だったのが、諸般の事情で更に1年繰り下がるということで、地域の人たちの残念な気持ちが伝わってくるような気がいたします。

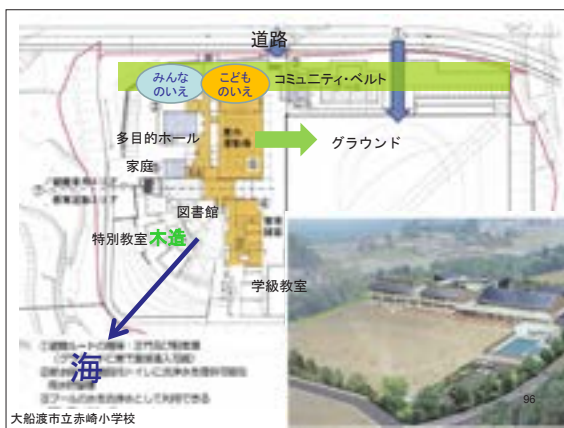
(スライド97) それから、これは東松島の学校で、この奥にある学校、地域全体が津波に、山を削って新しい市街地を作ります。

(スライド98) そこで議論をする中で行き着いたのが、木造です。地域の木でつくるということでした。これは今、設計の最終段階になっています。コンセプトは「森の学校」ということです。

(スライド99) 最後、これは石巻の雄勝地区の学校で、これも白っぽいところは全部津波で、何もなくなっています。その中にある学校と、その近くの学校、5校を統合して学校づくりを進める。学校づくりの話に参加したときに、地域の人たちの元気が出てきたという、そんな印象を持っています。

ですけれども、5校が一緒になった小中学校の児童生徒数が、スタート時点では今30名です。30名の学校を今作ろうとして、市、あるいは、関係者が努力されているところですが、そこに子供たちも参加して、30名の規模ですから、ここにいる子供たちでかなり半分ぐらい皆集まってきているということが言えるかもしれません。

(スライド100) 皆さんと議論して、子供と書いて「みらい」と読む、それを実感しまし



スライド96



スライド97



スライド98



スライド99

た。そういう未来を支える、未来である子供たち、その子供たちの育ち、生活する場である学校をどうやって作っていくか、実現していくか。

(スライド101) それは、みんなで作っていくということだというふうに思います。先生が参加し、子供も参加し、大人もそれに加わり、こういう学校づくりが、被災地でも、あるいは、全国各地の学校づくりでも、今、進められるようになってきている。そういう実践も集めながら、改めて今日の課題である、日本の地域を支え、心をつなぐ学校づくりということを進めていけたらというふうに思います。

(スライド102) これはつくるところでも子供たちが参加。この思い出が、将来、この学校を大事にし、この学校を起点にしながら、その地域を支えていこうとする大人になっていく、まさに子供が未来だということだというふうに思います。

(スライド103) そういうことを踏まえて、これは私の恩師の言葉ですが、亡くなる前に聞かされた「学校は教育施設ではない、学校は学校である」。

つまり、今日お話しさせていただいた、様々な地域における意味合い、精神的にも、活動的にも、いろいろな意味合いで学校というのをトータルな存在としてとらえていく、それが地域の核となる学校づくりということだと言えるのではないかと考えております。

以上、長時間にわたり御清聴ありがとうございました。



スライド100



スライド101



スライド102



スライド103

■司会 長澤名誉教授，ありがとうございました。

それでは，引き続き，パネルディスカッションに移らせていただきます。机を配置しますので，しばらくお待ちください。

Ⅲ. パネルディスカッション & 質疑応答

■司会 それでは、準備が整いましたので、再開させていただきます。

ここからは、木下勇千葉大学教授にコーディネーターをお願いいたします。

木下教授は、ウルス・マウラー博士と約30年間の研究交流を継続的に進めておられます。また、日本子供環境学会理事、日本学術会議子供の育成環境分科会幹事を務めるなど、子供環境学の権威でもございます。

木下教授、どうぞよろしくお願いいたします。

■木下教授 西さん、どうもありがとうございました。

皆さんこんにちは。千葉大学の木下です。

今御紹介にあずかりましたように、ウルス・マウラーさんは、私がスイスのエーテナーという、カミナダさんが今教授をされているスイス連邦工科大学に1979年から80年に留学したときの、当時の都市計画の研究室のアシスタントです。

その後、彼はシュタイナー学校の先生になって、それで、学校建築の専門家になり、建築家と教育者をつなげるネットワークというのを展開していきまして、その話も面白いなと思って、前から紹介したいなと思っていたところです。

それから、カミナダさんの建築に出会ったのは、2007年から8年頃だったか、愛媛県の内子町の農村部の村づくりというか、地域起こし、その二十何人かの内子町の石畳という地区ですが、その集落の人たちが、スイスの地域づくりの視察というか、そのコーディネートをして、それでフリン村を訪ねて、これはすごいなと思った次第です。

カミナダさんはそこで生まれて、学生時代からずっとこつこつと修復や改築や新築や、住宅をどんどんつくり上げた、古さと新しさを備えて村並みが復活したというか、再現した。結構人が来るような場所。その取組みたいなものが、なかなかほかの建築家にないことでありました。

私が2010年に、サバティカルで、再度スイス連邦工科大学に行ったときに、カミナダさんのドクター論文の発表会というのが、連邦工科大学のセントルームでありまして、多くの方が来場し講演を聴いていて、カミナダさんをいつか日本に紹介したいと思っていたところです。

また、長澤先生が紹介いただいたように、新聞等でも話題になっている統廃合の基準の手引ですか、60年ぶりに見直しというので、なぜか文部科学省は学校統合をせっついていくかのような印象でいわれているところもありますが、必ずしもそうではなくて、長澤先生も中に紹介しました、文部科学省の48年の通知をちょっと紹介させていただきます。

学校統合の意義及び学校の適正規模については、先の通達に示しているところであるが、学校規模を重視する余り無理な学校統合を行い、地域住民等との間に紛争を生じたり、通学上著しい困難を招いたりすることは避けなければならないということです。

また、小規模学校には教職員と児童、生徒との人間的な触れ合いや、個別指導の面で、小規模学校としての教育上の利点も考えられるので、総合的に判断した場合、なお小規模学校として存置し、充実する方が好ましい場合もあることに留意すること。そういう文章、

通知が出されているのですね。文部科学省の通知の第431号ですが、これは今でも生きている強い方針だと思います。

確かに日本は人口減少、そして、昨年5月に日本創生会議から、まあ日本の自治体の半分ぐらいは今後30年で消滅すると、ショッキングな予測が出ています。地方はこの予測からかなり衝撃を受けて、地方の振興というのを非常に真剣に考えなければいけない。また、人口減少、特に少子化をどう考えるかということは、我々に突きつけられている課題であるかと思っています。

そういうことから、昨年の政府の教育再生実行会議でも、学校規模の適正化に向けての指針、そういうことが今回の手引の60年ぶりの見直し、それがあたかも学校統合を進めているかの印象に取られているのですが、そうではありません。

もちろん、財政面からそういう圧力、そういう志向は働きますが、地方の振興と、地方の、今日のテーマである地域の在り方と学校というのをやはりよく考えていくことが必要です。

そこで今回、スイスの事例をいろいろ聞いてみようということで企画した次第です。

長くなって申し訳ありません。

少し数値的なことを言いますと、スイスは人口が800万人ほどですので、我が国1億2,000万人と、規模が違います。国土の広さも九州より一回り小さいところであります。

しかし、スイスは、皆さん御存じのように、時計を初め、ネスレ等の国際的な企業、そして、一人当たりのノーベル賞の受賞者の比率を言うと世界トップですね。それから、いろんな特許の出願率も高いです。かなり工業面、先端技術的な面でも、科学技術の面でも進んだ国で、御案内ありましたように、PISAでもOECDのトップクラスを常に保っております。

学校の数は、スイスは自治体の数が2,740、2008年ぐらいの数値ですが、日本は市町村合併を進めてきて、前は3,300とかあったのが、今1,800ぐらいですね。これも財政的な面、自治体の財政、我々日本社会がたどってきたのは、経済を重視するため、財政的な面から、いろんなものを、自治体の仕組み含めて、そういう統合を効率面から進めてきたわけです。そういう傾向が果たして未来を明るくしているかどうか。

特にまた、学校という、先ほど長澤先生の紹介に、子供は未来である、未来が本当にそれで希望が描けるのかというようなことも考えてみる必要があるかと思っています。そういうことから、地域と学校との関係を改めて考えてみる、それは非常に大事なことではないかと思っております。

もちろん、スイスと日本は、制度や文化的なことにも違いがあります。カミナダさんがいうように、差異というものを大事に、アイデンティティー、それは文化、いろんな面、それは非常に大事なことだと思っております。

ですから、スイスのまねをするのではなく、そこにある学校と地域の関係や、共通することに注目する、これはグローバルな共通面というものを、また考えてみる必要もあるのではないかと思います。

スイスには全体での文部科学省はないので、各州で教育行政を行っています。それはそ

れでまた、スイスの中でも日本とは違った中で、いい面もあるし、やりにくい面もあるかと思います。そういう違いは違いで見ながら、学校と地域の関係というものを考えていく必要があるかなと思います。

人口1万人当たりの小中学校数でいいますと、スイスは小規模校が約8校になります。日本は、人口1万人当たりの小中学校数でいうと、約2.75になります。3倍ぐらいの学校数の開きがあります。それだけスイスは小規模校が多いということになります。

小規模校が多い中で、先ほどカミナダさんの紹介のように、私が訪ねたときには、フリンの学校はちゃんと学校で、子供たちがいて、学んでいましたが、市町村合併というのがやはりあって、廃校になったという事情もあります。そういう面は共通する課題もあって、廃校の活用なども地域と学校の関係から重要なことかと思っています。

また、学校を維持する、それに対する地域の取組というようなこと、それも地域の力というものが長澤先生から提起されたと思います。

それでは、私の方から壇上の方々にちょっとお聞きしたいのですが、今日のプレゼンテーションですと、マウラーさんとカミナダさんはそれぞれ、理念と形の学校のこと、地域との関係で、学校をどうつくるかの話をされました。

いろいろスイスの学校が出てきたのは、長澤先生のスライドが多かったですね。長澤先生が日本人の目から見た学校のとらえ方、それについてどう思ったかとか、日本の学校も合わせながら紹介しましたが、最後に長澤先生が御発言されて、日本の課題も含めて提示していただきました。そういう中で、学校は地域の力が示されるとか、学校づくりが地域の力になるという話がありました。

さて、そこで、マウラーさんは、今日の話ではなかったですが、学校づくりに地域の人に参加したり、子供が参加したり、コンペの企画とか、地域、学校づくりが地域の力をつくるというような話を長澤先生がしましたが、スイスではそういうことがあるのか、それをどのように進めているかというようなことをちょっとお聞かせいただければと思います。

■マウラー博士 3年くらい前から、住民、そしてまた、教員の中で、計画に関わろうという動きが次第に大きくなっています。これはスイスでも比較的新しい動きであります。

プロジェクトの中に実際に参加いたしまして、プロジェクトについて議論していくということ、例えば、それはコンペの中の審査員と一緒に話をしていくということになりました。

今までは、招待された都会の専門家、つまり建築家が、このプロジェクトはいいので、建設しなければならないと言っていました。現在では、住民、特に教師が、実際に教育的にも最新の水準の校舎を希望するので、そういうわけにはいきません。

私が紹介したパスペルスがその例です。私は、利用価値について幾らか否定的に紹介しました。もう少し肯定的な面をお話しします。このパスペルスの学校のように、過去10年間で全世界からこれほど多くの視察団、建築家の視察団が訪れた学校はほかにはありませ

ん。これらの建築家たちは、廊下がこんなに硬いとか、縁が鋭いとかという点には興味を示しません。写真を撮って、小さな山岳地帯の村にこのような優れた建築物があり、村には経済的にそんな余裕があることに驚いていました。山を見上げ、小さな村であるパスペルスに研修旅行をするということが、肯定的な点です。

私が肯定的に紹介した、「Varnas」の学校、この木造校舎は建築家を魅了することはできないでしょう。この校舎は普通の木造校舎で、南アメリカや日本の雑誌には掲載されません。したがって私は、この「地方の特色」という旗艦プロジェクトを、この議論では肯定的に評価してみようと思います。

さて、関与、住民の参加に関する質問についてです。私が紹介したムッテンという村では、私が数えたときは9人しか生徒がいませんでした。7人というのが下限値であります。ですから、生徒が二人いなくなると、この学校は閉鎖しなければなりません。いつも予測はできます。村には今、まだ学校に行っていない子供が5人います。子供を持つ若い家族をこの地方に招くことができない場合は、学校をいつまで維持できるのでしょうか。ムッテンは開発した土地がほとんど無償で提供されたので、過去2年間は学校を維持することができました。非常に多くの雑誌に「私たちは、都会から脱出して、地方の村落共同体における健康な空気という恩恵を受けたい、子供を持つ家族を探しています」という広告を出して、成功しました。これが参加で、学校を存続させる助けになります。そういったことも、恐らく、村人たちの参画があったから実現したのだと思っております。

■木下教授 お聞きしたいのですが、カミナダさんは、地域の参画というより、ずっと地域に入り込んで、文化や技術を含めて、地域の、ドイツ語でビルドム、大人の人も含めていろいろなことを学び合う、そういうことで場をつくるということを展開されていますが、そういう中で、地域の人との関係は、参画でやっておられるのか、コミュニケーションとか、地域の人はそのような学校づくりにどのように関わっておられるのでしょうか。

■カミナダ教授 建築家としては、常に少しだけ指導者であり、人々をある方法に導かなければなりません。あるアイデアがある場合、それが事前に全て正確には確定しておらず、基本図形のようなもので、このアイデアの中で非常に多くの可能性があることは、私にとっては極めて重要です。参加という考え方はとても重要です。私たちは、いつも同じことを行ってきました。出来事を語り、アイデアを開発し、人々を招待してこのアイデアに参加してもらいました。

まず、心理的試みを行いました。全ての人が自分もこのアイデアの一部である、と感じるように、あらゆることを行いました。「私は不要であり、私を誰も必要としていない」と考えることほど、人間にとって嫌なことはありません。これはとてもやりきれないことです。ですから、アイデアに貢献できるか否かに関係なく、アイデアの一部であると感じてもらう必要があります。貢献できるかどうかは二の次であり、多分それほど重要ではないのでしょうか。

しかしアイディアについてのこの話合いの形は、法的紛争ではありません。法的紛争では、一人が正しくそのほかの者が正しくないことを既に皆が知っています。特定の議論の中には様々なオプションがあります。私たちは、これをフリンだけでなく、別の場所でも実施しました。かなりうまく機能しました。

■木下教授 私の専門はまちづくり、地域づくり、都市計画ですので、住民参加のまちづくりをよくやっていますが、そういう中で、ワークショップというのをいろいろ開く。でも、地域の中で担い手が出てくることをインフォーマルにも話したりしながら、できるだけ「共犯者的関係をつくる」というのはよく言います。いい意味での共犯者。

それと似たように、アイディアに関わっている、自分がアイディアを出したかのように考えてくれる人たちが増えてくるということ、それと非常に似たようなお話として聞きました。非常に大事なことだと思います。

さて、長澤先生は、先ほど紹介された東日本大震災の被災地でも、いろんな地域の状況がある中で、それだけ合意形成とか、学校づくりも大変かと思いますが、そういう対立や葛藤（かつとう）を超えてどのように学校づくりが展開されていっているのか、ちょっと時間が迫っていて、余りその辺りがなかったので、ちょっと補足願えればと思います。

■長澤教授 いや、対立、葛藤があるというよりも、学校の再建がスタートして、そこに自分たちも関われるということについて、皆さん、回数を重ねて、最初のうちは何を言っているのかということまで口ごもった方もおられたけれども、何回か重ねると、非常に皆さん顔が上を向いて明るくなって、一生懸命話していただくようになりました。

ですから、先ほど、子供と書いて「みらい」と読むというのは、そういう参加している人たちの顔を見て感じたことです。つまり、学校のことを議論しているときは皆さん明るくなるんですね。つまり、先が見えてくる。

特に、御紹介した石巻の雄勝の学校というのは、町が全くなくなったわけですから、ここで、もともとは200人でしたかね、5校合わせると。そのくらいいた子供が、少なくともスタート時には30人。でも、学校ができることで、皆、外で生活をしている人たちがまた集まってきてくれる。それが地域復興のスタートにできるのではないかと思います。

それで、一つお話しさせていただくと、最初に雄勝の人たちに伺ったときに、寄宿舎が欲しいという、寄宿舎がつくれないかというのが話題でありました。それは、都心の子供たちに通ってもらって、それで学校の規模を維持するための、いわゆる山村留学みたいなことを進めるための寄宿舎なのかというふうに思ったのですが、そうではなくて、親は仕事の都合とかそういうところで、今住んでいるところを離れられないけれども、子供だけでも学校に通わせられないか。

つまり、その地域の中で育った体験というのが、とても豊かな海との関わりがあり、いろんな地域の産業があり、そういうことと関わる、そういうことがまた子供たちの誇りになるとか、地域で生きることを意味を感じるとか。そのためには、子供のときに育った時

間、そこで生活した時間というのを早く用意したい。そのために寄宿舎がつくれないかということがありました。そのくらい、みんなの思いは同じというような感じがありました。

■木下教授 スイスも寄宿舎付き等、いろいろな学校があつて、日本人の家庭でもスイスに子供を送ったりするところもありますが、カミナダさんの紹介した修道院の学校、すばらしい寄宿舎のデザインであり、そして、学校以外に家畜舎、学校の教室内の授業だけではなく、座学だけではなくて、ああいう家畜、牛や何かの世話をするとか、そういうのも教育の仕組みの中にあるということですね。それが空間として提供されている。そういうスタイルは、ほかにもスイスはあるのでしょうか。

■カミナダ教授 学生が奇妙に一方に偏っていることを感じています。ですから、彼らがものになじむようにしています。つまり、再び彼らは、ものがどのように構成されているかを理解しなければなりません。これが、全ての学校における基本的な原則です。若い人たちもこれを理解したいと考えていることは、すばらしい。彼らは私たちのもとに来て、「どのようにしてそれが作られるかを知りたい、もっと多く経験したい」と言っています。

先ほど御紹介しましたように、私たちは建築物を材料の特性を基にして設計しますので、特定の材料がどのような能力を持っているかを理解しなければなりません。コンクリートにどのような能力があり、木材にどのような能力があるかです。これは、エネルギーと付き合う場合と同じ現象です。私たちは、現在の多くの建築家が、基本現象、この物理的特性についての知識が少ないことに気付いています。どのように室内を換気するか、例えば不活性材料は室内環境にどのような影響を与えるか、熱放射と対流の違いは何かなどです。これらは、建築家が常に持っていなければならない知識です。私たちは、繰り返して理解しなければなりません。

大学の話が出ましたが、もっと小さい頃からそれを始めることができるので、本日の私の講演もそのような構成にして、最後に、わたしが大学で関心を持っていることについてお話しました。もっとずっと小さな頃から始めることができるでしょう。ギムナジウムもそのための有効な場所です。それが、修道院附属学校の歴史です。寄宿舎にはすばらしい伝統があります。これは別の種類の教育です。スイスの多くの親は子供を修道院附属学校に入学させます。その理由は、子供が別の扱いを受けるからであり、肯定的なものだけでなく、別の種類の扱いを受けるからです。

偶然、わたしが寄宿舎を建てたところで、修道院畜舎が火事で燃えてしまいました。修道士による放火かどうかは知りませんが、どうでもいいことです。いずれにしても修道士が私を呼んで、「畜舎を再建しましょうか」と質問しました。そこに加わった専門家は「いいえ、中心的な業務に集中しなさい。それは教育です。農業は農民に任せておけばいい」と言いました。私は修道士を勇気づけて「いいえ、農業も別の種類の教育です、プロセスを理解し、再びものを理解する。子供たちは一日中畜舎にいるわけではなく、時々橋を渡ってそこを訪れて、農民と話をして何かを経験するのです。これが全体的教育の考え方で

す」と話しました。この意見が受け入れられて畜舎を再建しました。潜在的な山小屋です。

建築家にとっては、精神的知識だけでなく、身体による経験が重要です。感性を持たない建築家には、建築することを禁じるべきです。あなたが好きな、この写真で示したような校舎や、幼児が素足で硬いコンクリートを踏むような住居からは、このものの感覚を決して得ることはできません。感覚は、ほんの小さい頃に始まるのです。体験、感性、そして感覚性。これらは、対照的な体と精神の間のどこかに位置しなければなりません。

■木下教授 長澤先生、スイスの小さい学校の中でも、工作室や、専門の技術を学んだりする空間が用意されている。それから、スイス、ドイツもマイスター、技術者、職人の後継者を育てる実業教育といいますか、そういうプログラムもしっかりありまして、どちらかというと、いい中学校、いい高校に入って、いい大学に入って、いい企業に入るという路線だけではないんですね。そういう職人や農業の後継者を育てていく。

地方の問題を考えたとき、地方の後継者をいかに育てるか。そこは地方だけではなくて、大都市も、いろいろな日本の技術者の後継者というのは、非常に将来を考えたとき大きな課題ですが、それを生きる力と言ってもいいですが、そういう環境の中で。

そういう面では、スイスの学校では、コンペなどでも、マウラーさんに聞きたいですが、かなり専門の、いろいろな実業教育の空間づくり、場所づくりというのは非常に重要なのでしょうか。

■マウラー博士 スイスは、フランス、イタリア、スペインとも違うと思います。スイスでは手仕事というのが、ペスタロッツという教育者と関係しているのかもしれませんが。ペスタロッツは「教育は頭と心と手」と言っています。ですから、幸いなことに、今でもスイスでは、手工業的な教育が非常に高い価値を持っているのです。

しかしこの教育は、常に脅かされています。それはアカデミック化のためです。ピサやボロニア改革なども、全てアカデミック化によるもので、この方向への強い動きがあります。スイスではこの動きに同調してはならないでしょう。スイスの良質の職業教育システムがなくなると、今よりも多くの若者が失業するでしょう。大学における勉強に向いていない人、頭の中で抽象的に考えることはできないが、手がとても器用な人、書いたり話したりできないが何かをつくることができる人が多くいます。これらの子供に対して、早い時期に手工業の技術を受け、学校では、どのみち身につかない試験で苦しめないことです。

ヨーロッパで、例えばコペンハーゲンでは、職業教育をしているある町があります。石積工が、最も美しい石壁をつくることを競う競技会があります。スイスの人はいつも大体良い成績を収めています。これは、授業を受け持つマイスターが高い水準を維持していて、それほど多くは失われてはいないことを示しています。

■木下教授 ありがとうございます。

さて、時間が迫っていますが、会場からお一人、ちょっと時間の都合で一人、二人ぐら

い、質問なり、感想でも結構ですからお聞きしたいと思いますが、いかがでしょうか。

一番後ろで挙がっています。お願いします。記録のため、所属とお名前を言っていただけますでしょうか。

■質問者 まちづくりの活動をしていますアカマツと申します。よろしくお願いします。

2点お尋ねしたいと思います。

まず1点は、スイスにおいて、村の学校を守れなかったというお話がありましたが、場としての活用ということでは取組があるというお話だったわけですが、学校の統廃合が行われたときに、母体校というか、センターとサテライトのような組合せで、学校の廃校になった場を部分的にでも学びの場として、もちろん単なる場としての活用だけではなくて、子供たちの学校教育の一端でも担い続けるような、そういった取組があるのでしょうかということが1点。

それから、木下先生からも冒頭のところでお話がありましたが、スイスの人口規模からしますと、800万、神奈川と同じぐらいという規模だと思いますが、その中で、さらに、連邦ですから、文献的なカリキュラムというか、教育システムがある。

日本は、高度経済成長期の中で、キャッチアップ型の国家モデルをつくった中で、非常にナショナルカリキュラムが強い形で成立しているわけで、そうした状況に対して、ローカルカリキュラムをつくるのが非常に、分権型で、かつ、空間の多様性を生み出すことにとって非常に重要な可能性を持っているとも思われるわけですが、日本においてナショナル型のカリキュラムからローカル型のカリキュラムに移行して、かつ、空間もより多様なものにしていくという可能性について、どんな見立てをなさっておられますかということ、スイスでの学校建築、あるいは、学校現場という知見を通して、少し示唆を頂ければ有り難いと思います。よろしくお願いします。

■木下教授 そうしますと、一番目の質問は、統廃合されて廃校になった学校の活用というので、それでもある程度学びの場を担う場があるかどうか、これは、マウラーさんか、カミナダさん、どちらかお聞きしたいと思います。廃校になった学校の活用で、少しでも子供たちの学びの場の一端として展開している例があるかどうか、御存じでしょうか。

■マウラー博士 カミナダ先生がおっしゃったように、スイスにおいても、幾つかの自治体の合併のような、学校の統合があります。自治体が、子供の数が少なくなって、廃校に追い込まれます。先ほど話し合いましたが、スイスで起こっているように、学校を、例えば観光のために住居にする前に、十分に検討して、想像力を発揮しなければならないと思います。一旦民間に引き渡してしまうと、再び公共の建物に変えることは難しいのです。元に戻すのはほとんど不可能でしょう。ですから、どのようにして学校を教育に活用するかについて、想像力を発揮しなければなりません。

日本におきましては、学校の活用が可能だと私も聞いております。例えば、廃校になっ

た学校を、親たちが外国語を習うとか、コンピューターを習うとか、そのような教育の需要に応えるために使用することもできるわけです。村では、高齢者の多くが携帯電話を使えるわけではなく、それでも使いたいのですが、都会に行くには敷居が高すぎます。村の中で、携帯電話の知識を持っている人、例えば先生が、その高齢者に使い方の初歩を丁寧に教えるとしたら、これは高齢者にとっては重要であり、学校の活用にもなります。

そのために、私のアイディアを紹介させていただきます。私は、ギムナジウムに通いましたが、良い生徒ではなく退屈していました。私はいつも森に行き、鳥を追いかけていました。鳥の声を全てまねすることができ、本当に鳥と精神的に結びついていました。

ギムナジウムの6年生のとき、およそ16歳ですが、私たちは3週間にわたって山間部の村に滞在しました。学校コロニーと呼ばれていました。私は3週間一人で、先生の監督もなく、アルプスの山の中で鳥を追いかけていました。山の中を走り回って、ワシを観察し、巣を探し、記録しました。私は16歳で、鳥類学を専攻して4学期目くらいの学生と同じ水準に達していました。これは、3週間にわたって、学校の支援によって私が情熱を傾けることを認めてくれたからです。

そこでアイディアですが、これは恐らく日本におきましても可能だと思います。廃校になった学校を、このような学校コロニー（ふさわしい名前を考える必要がありますが）にして、学級全体で、教師と、多分親も一緒に、地方に行きます。学校で授業をするとともに外に出て、例えば林業従事者が樹木を切り倒すのがいかに危険であるか、樹液が抽出されるようにいかに珍しい切り方をするか、特定の日だけ作業するのかというような質問が出てきたときは、村人の話を聞きます。そして地元の専門家が校舎の中でこの種の問題を取り扱います。生徒は一日中生徒である必要がありません。こうして学校が活用され、一定の会費を支払う必要があるのも、お金が入ってきます。

私はシュタイナー学校で働いておりました。その学校では、上級段階の全学年の生徒は、毎年いわゆる実習に出かけました。例えば私たちは、アルプスのある山の測量を行いました。雪崩対策の計画が必要なのですが、それにはお金がかかりすぎるので、生徒たちが専門家の指導の下で計画図を作成しました。私は見習建築家であったので、測量の機器を使うことができました。そして、生徒たちと一緒に雪崩対策の計画図を作成し、村がそれを買いました。専門家が作成した場合よりもはるかに低い金額でした。このようにして生徒は、有意義で必要とされる仕事をしていると感じ、これはお金で買えるものではありません。

雪崩対策は、山の麓で生活している人々にとっては非常に重要です。同時に私たちは、正確に作業し、正確に測量し、専門的に作業することも同時に学びました。生徒たちは16歳でした。

シュタイナー学校は、都市の外で行うこの種の実習においてどのような教材を使うか、という提案を多くしています。東京のことを考えると、ここは極端です。子供が地方に出かけて、異なる環境、異なる関係を経験することはとてもいいことです。

■木下教授 少しだけ、カミナダに紹介いただいたフリンの学校が廃校になったというのは、私も、あんないい学校がとちょっとショックでしたが、あと地域で使っているということでした。子供らも、先ほどのアカマツさんの質問は学校教育のカリキュラムだけなのか、学校でも総合的学習の時間って日本でも、地域の人たちも先生になったりとか、そういうような大人、子供含めた使われ方がその後もされているのでしょうか。

■カミナダ教授 そこは私も余り詳しくは知らないですが、縮小について少しお話しします。フリンも人口が減少しています。大都市へ人口が流出していますから、残念ながら、地方での人口減少は世界中に見られると思います。人々は大都会に集中します。人口が減少していることは、それほど深刻なこととは思いません。地球上には人間が多すぎます。スイスでは幾らか分布状況がよくありません。やはり大都会に人が流出してしまっって、山村は生き残れなくなっています。

フリンでは、村を維持するためには、人口が500人必要だと言われていました。そうしなければ、学校もお店も維持することができない。そのほかの制度というのも運営することができないと言われていたのですが、実際には500人は必要なく、250人いれば大丈夫だということがわかりました。

また、どこかの村が廃村になってしまったとしても、それを余り悲観することはないと思うのです。歴史を振り返ってみると、スイスでも廃村になった村はいつの時代でもありました。村の存続が断念され、村民は移住していきました。これは、それほどドラマチックなものではありません。自治体の合併があります。フリンもほかの九つの自治体と合併しました。ですから、今、生徒は、谷間の開けたところの二、三の学校に通っています。親たちは、村の学校がなくなると心配しました。子供たちはバスに乗って学校に行くのに非常に喜んでいますし、新しい関係もできます。

ただ、合併の問題は、別のところにあると思います。自治体が大きくなるとともに、責任をほかのものに委ねようとしします。それが普通です。器が大きくなれば、自分で責任を取れるのでしょうか。私は平気で押しつけるでしょう。これが合併の問題です。継続して機能している学校という質問に戻りましょう。フリン村ではそれについて真剣に考え続けています。心配しているのではなく、新しいアイデアを開発しなければなりません。

先ほどマウラーさんがおっしゃったように、教育の場として維持していく、あるいは、新しい使い方をする、都会と地方を結ぶ新しい方法というようなアイデアです。それができればいいのですが。

昨日、どこの山に行ったかをお話ししました。日本では、都市の住民がどのくらい山の価値を認めているかについては、私は知りません。スイスほど強くはないと感じていますが、間違っているのでしょうか。教えていただきたいと思います。山岳地帯の価値が認められるためには、教育による契機が必要です。価値評価が生ずるためには、相違が必要です。これが現在の私のモデルです。山岳地帯は都市と違っていなければなりません。そうでなければ、誰も山に強い関心を持ちません。つまり、違った価値評価が生まれなければなり

ません。これは、下の都会ではできないことが、上の山間部では可能であるというような、相違によってしか生まれません。それによってこの価値評価が生まれ、関係が生まれます。

最新のプロジェクトでは、連帯ということに関して変わった経験をしました。「山間に住んでいる貧しい人は金持ちの都市住民からお金をもらおう」というふうな考え方があります。村民も生活しなければなりません。しかし、この種の連帯はうまくいきません。私が相手から何かをもらう場合は、それは私にとって価値があるものでなければならず、これは相手にとっても同じです。価値は両方で行き来しなければなりません。これが成功しなければなりません。

日本でもすばらしい職人技があります。例えば、漆工芸とか。スイス人にはあんなことは到底できません。マウラーさんのおっしゃった意味で、こういった手工芸の職人を教育する場所とか、そういう形にも使えると思います。職人用の工房をつくることもできるでしょう。手を使う教育は、頭を使う教育と同じように重要です。これは何度も言っています。手工芸を促進するというと、これはやはり教育の一部でないといけないと思います。なぜなら、私たち山間部の人間は、手工業を、山岳地帯における生活の基盤であるとともに、可能性と見なしているからです。観光と農業、手工業です。

今、都市で販売するために、山岳地帯で家具を製造するというプロジェクトを進めています。大きなマーケットではありませんが、ちゃんとマーケットは存在しています。彼らが機能するためには、それほど多数の買手も必要ありません。そしてそのような買手も存在するでしょう。

■木下教授 二番目の質問ですが、私の理解では、スイスはローカルカリキュラムですから、それが多様性を生んでいますね。質問は、それを日本に適用した場合にどういうことができるかというような内容かと思いますが、長澤先生いかがでしょうか。

■長澤名誉教授 カリキュラム論は別にして、今、議論されているのは、やはり地域の価値を、子供の側から言えば、地域の価値を知り、地域に誇りを持ち、地域の中で生きる力を身につけていく。大人の側から言えば、未来の担い手である子供に何を伝えたいか、どういう力を身につけてほしいか。それがローカルカリキュラムということになってくるのかなというふうに思います。

それと施設と絡めて言うと、まさにそのためにみんなが参加してつくる仕組み。だから、どういうことを伝えたいかということも議論しつつ、そのためにどういう施設、建物にしたいかということが一緒に議論される機会として、学校づくりのプロセスというのを生かしていくということが大事だと思います。

今、日本の学校施設の基準について言えば、規模に応じた面積は用意されていますが、それをどういう施設構成にしていくかということについては、カリキュラムがきちんとこなせるだけの施設設備が整っていれば、あとは割とみんなの力で、こういう学校にしたいということがあれば、それが実現できるような仕組みになっていると私は思います。

だからこそ、それをどういうものにしていくかということの議論のプロセスをきちんと取るということが大事だと思います。

つまり、それは、カリキュラムとか教育の内容と、施設のことを考えるというのは、別々の問題ではなくて、一緒のことだととらえていくことが大事だと思います。

ちょっと質問の趣旨と離れて、この場をかりてお礼を申したいことがあります。それは、先ほど申し上げた雄勝の学校づくりで、今日この場で石巻の担当で頑張っておられる方も来ていただいています。雄勝の人たちが、自分たちの学校が30人ぐらいでスタートすることについて不安を持っているときに、私が計画に関わって、皆さんの前でスライドを使って「こんな学校づくりを」とお話しさせていただいたときに、ドゥビンのお話を紹介してもらいました。

参加した人たちは、ドゥビンの学校がしっかりとその地域の中で役割を果たし、そこで子供たちが育っているという話を聞いて非常に自信を持ったというか。私たちは私たちが小さな学校になるけれども、頑張って学校をつくっていかう、そういう力を与えてくれた。そのことについて、この場をかりてカミナダさんにお礼を申し上げたいと思います。

■木下教授 ありがとうございます。

もう皆さんに約束した時間も超過しておりますので、そろそろ終わりたいと思います。ディスカッションの時間が十分に取れなかったことは、非常に残念ですが、スイスと日本は先ほどのカリキュラムの話は全く違いますし、制度もそれぞれ異なる。そういう違いがある中でも、同じ課題を抱えているということがわかりました。

全て学校の存続や、また、廃校になる学校もあったり、地方の振興にもやはり課題を抱えながらも、そういう中で学校の存続、又は、新しくつくる、廃校になるとか、いろんな取組の中でも、学校と地域の関係性をどう考えるかというのは、お二人、今日のゲスト、マウラーさん、それから、カミナダさん、非常に学校の考え方を的確に、理念も含めて、学校とは何なのかということ強く訴えていただいたと思います。

■カミナダ教授 日本の方々に、学校をつくるのではなくて、工房をつくってくださいと言いたいです。工房は、貴重なものについて根気を養う場所です。詩人の手仕事があり、自由の手仕事さえもあります。手仕事は貴重なものを作るための根気のいる作業です。工房は根気強く手仕事が行われます。私は、校舎や学校の代わりに工房を建てたいと思います。

■木下教授 ありがとうございます。

フリン村の廃校の跡も、工房になりますかね。非常に重要指摘だと思います。つくるといふこと、それは、私も被災地のまちづくりの展開の中でも、本当にボランティアの方々が、石巻なんかも活発ですが、石巻工房初め、いろいろな、村3軒しかなかったところをまた再生しようと、いろいろな外からの人と被災した方が一緒になってつくる。つくると

いうことが、非常にいろんな学び、人のつながりをつくっている。それは学校も同じだということだと思います。

長澤先生の、吉武泰水さん、私の建築計画の非常に太祖というか、元祖、建築計画の大御所の人たちは、やはり理念的な面もしっかりしているなと思いました。「学校は教育施設ではない、学校は学校である」と。

その場合の学校というのは、ジョン・カミナダさんの「場所をつくる」、場所という意味、場所は、単に空間だけではなくて、それはその中で、マウラーさんが、感性を磨いたりとか、もちろん象徴的な意味もあるけれども、実践的な、実用的な意味もあり、カミナダさんは、一目で見ていろんなことが行われていることが見渡せる。

地方の学校というのはそういう場であるわけですね。小さいからこそいろんなことが見渡せる。それは子供たちも、地域の暮らしや、周りの自然も含めて学んでいく、それに地域の人たちが関わっていく学校、そういう学校と地域の関係は、小規模校ならではのものがあると思います。

複式、超複式学級の、ドゥビンの1学級で1年生から6年生まで、そういう中でも、単に、私たちは効率から、大人数でいれば競争で教育が成り立つ、教育には大人数の方がいい、いわばネオリベリズム、競争に任せておけばいいというような発想になりがちですが、いや、職人、先ほどの工房とか技術、生きる力というのを考えたときに、多様な生き方というのを見て、その地域の担い手になっていくというような教育の在り方というのを日本も考え直すべきではないかと思っています。

そういう面でも、単に経済的な効率からだけではなくて、日本創生会議が将来予測した半分の自治体が消滅する、本当にそのまま消滅してしまっているのだからというときに、それはやはり、その地域を担っていく子供たちが育つことにあると思います。

その工夫というのは、学校をいろんなつくる場として、また、被災地でもいろいろ外からの応援も得ながらいろんなことをつくっていく。そういうことが、本当は日本、これから求められるのではないか。それに大人も一緒に学校づくりをしていく。そういう姿を子供たちが見ていくということが大事なと強く感じた次第です。

つたないまとめですが、以上で私の方のまとめとさせていただきます。

Ⅳ. 閉会の挨拶

閉会の挨拶

齋藤 福栄 国立教育政策研究所文教施設研究センター長

■木下教授 最後に、主催の国立教育政策研究所文教施設研究センターの齋藤福栄センター長から閉会の挨拶を申し上げます。

齋藤センター長、よろしくお願いします。

■齋藤センター長 すいません、大変遅くなりました。本年度の文教施設研究講演会、いかがでしたでしょうか。

本日は、遅くなった時間にもかかわらず、最後まで御参加いただきまして、誠にありがとうございました。

ウルス・マウラーさん、それから、ジョン・カミナダさんからは、ふだんなかなか触れることのできない、スイスにおける学校施設計画のプロセスでありますとか、教育環境の理念、地域に根ざした建築の在り方、なかなか聞くことができないもの、貴重なお話をたくさん聞かせていただきました。ありがとうございました。

また、長澤悟先生からは、御紹介もありましたが、当センターが実施しました学校の復興とまちづくりに関する調査研究、これで被災地の支援をしていただいたわけですが、そのような経験も含めまして、今日的な課題を踏まえた、地域における学校施設の在り方についてお話を頂きました。

ただいま熱心に木下先生のコーディネーターによる御議論を通じまして、本日のテーマをより深く理解していただくことができたのではないかとというふうに考えております。

文教施設研究センターでは、今後とも、海外の研究ネットワークとも連携をしながら、引き続き、よりよい学校施設づくりに資する情報を提供してまいりたいというふうに考えております。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

本日はどうもありがとうございました。(拍手)

■司会 本日は、御来場いただきまして、誠にありがとうございました。

御記入いただきましたアンケートと通訳レシーバーを受付にて御提出くださいませ。こちら必ずお持ち帰りにならないようお願い申し上げます。

また、お手回りのものを今一度御確認いただきまして、お忘れ物なきようお願いいたします。

本日は、文教施設研究講演会「地域の核となる学校づくり 日本とスイスの学校建築」に御参加いただき、誠にありがとうございました。

それでは、お気をつけてお帰りください。

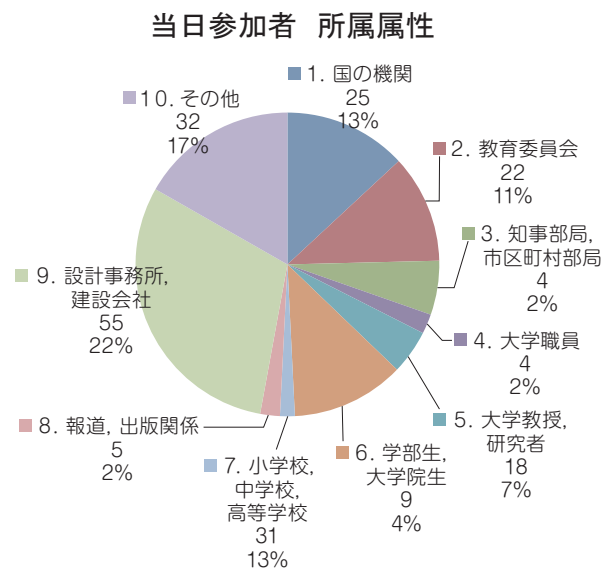
参考データ

参加者

事前登録者数:214 当日参加者数:191 当日参加率:89%

当日参加者 所属属性

	人数	割合
1. 国の機関	25	13%
2. 教育委員会	22	11%
3. 知事部局, 市区町村部局	11	6%
4. 大学職員	4	2%
5. 大学教授, 研究者	9	5%
6. 学部生, 大学院生	23	12%
7. 小学校, 中学校, 高等学校	3	2%
8. 報道, 出版関係	4	2%
9. 設計事務所, 建設会社	58	30%
10. その他	32	17%
計	191	100%

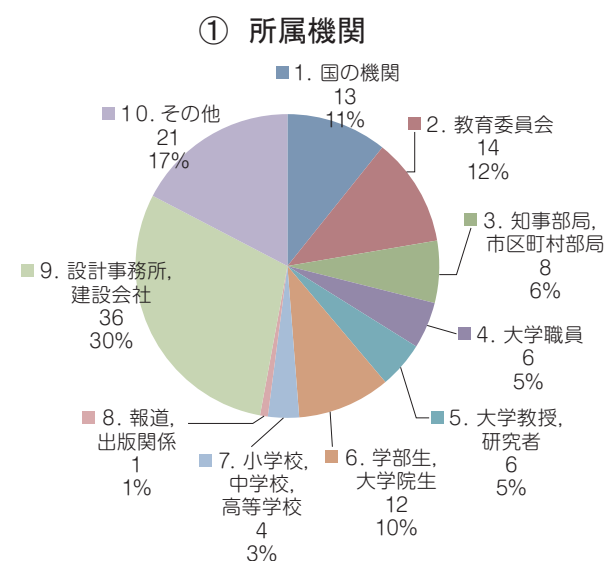


アンケート結果

参加者数:191 アンケート回答者数:121 回収率:63%

① あなたの所属する機関の該当番号に○印を付けて下さい。

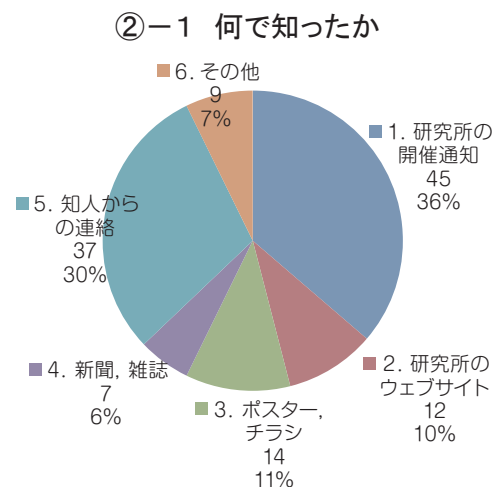
	人数	割合
1. 国の機関	13	11%
2. 教育委員会	14	12%
3. 知事部局, 市区町村部局	8	6%
4. 大学職員	6	5%
5. 大学教授, 研究者	6	5%
6. 学部生, 大学院生	12	10%
7. 小学校, 中学校, 高等学校	4	3%
8. 報道, 出版関係	1	1%
9. 設計事務所, 建設会社	36	30%
10. その他	21	17%
(メーカー, PTA関係, 民間企業, 経営コンサルティング, 家具デザイン, 大使館, 教育関連企業 等)		
計	121	100%



②-1 今回の講演会を何でお知りになりましたか？

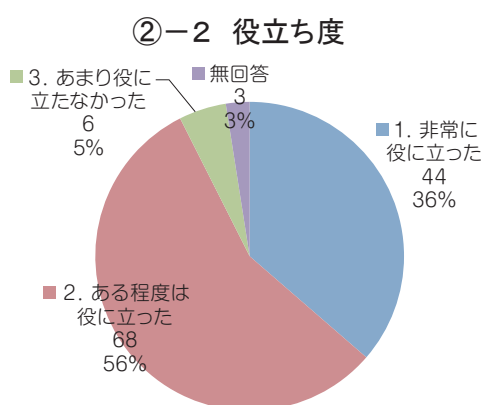
	人数	割合
1. 研究所の開催通知	45	36%
2. 研究所のウェブサイト	12	10%
3. ポスター, チラシ	14	11%
4. 新聞, 雑誌	7	6%
5. 知人からの連絡	37	30%
6. その他 (住総研のニュース, 国研からの連絡, スイス情報のfacebook, 千葉県総務 部学事課からの通知など)	9	7%
計	124	100%

※二重回答あり



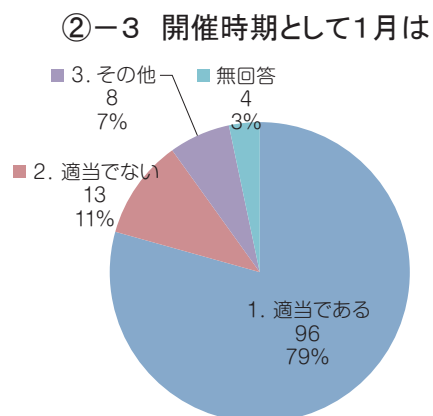
②-2 今回の講演会は, あなたにとってどの程度役に立ちましたか？

	人数	割合
1. 非常に役に立った	44	36%
2. ある程度は役に立った	68	56%
3. あまり役に立たなかった	6	5%
無回答	3	3%
計	121	100%



②-3 1月という開催時期についてどう思いますか？

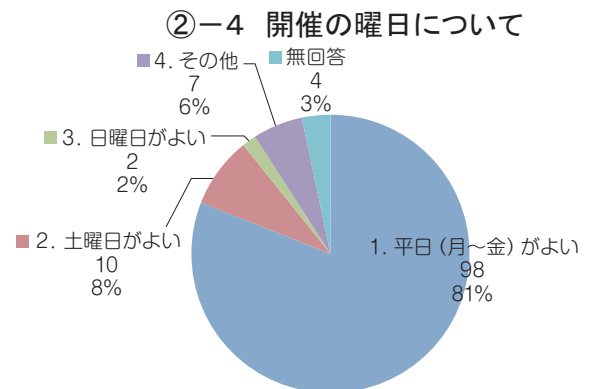
	人数	割合
1. 適当である	96	79%
2. 適当でない (4~12月の間, 夏冬2回など)	13	11%
3. その他	8	7%
無回答	4	3%
計	121	100%



その他のコメント
 ・時期は問わない
 ・もっと早い時期
 ・冬以外

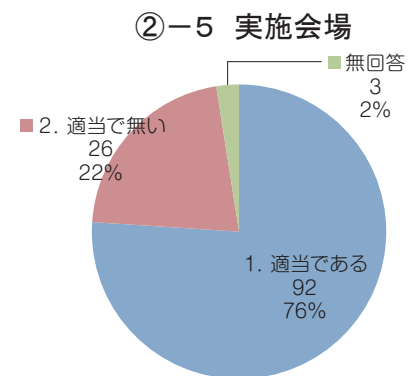
②-4 水曜日の開催についてどう思いますか？

	人数	割合
1. 平日（月～金）がよい	98	81%
2. 土曜日がよい	10	8%
3. 日曜日がよい	2	2%
4. その他	7	6%
無回答	4	3%
計	121	100%



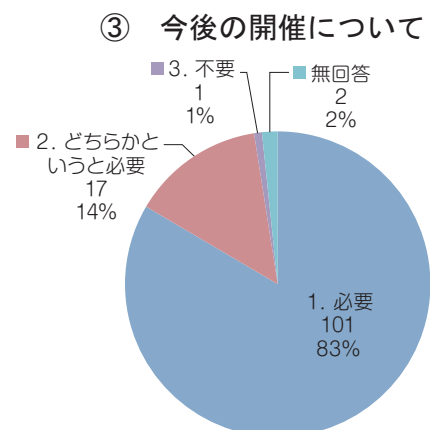
②-5 今回の会場についてどう思いますか？

	人数	割合
1. 適当である	92	76%
2. 適当で無い	26	22%
無回答	3	2%
計	121	100%



③ このような講演会を今後も開催していくことは必要だと思いますか？

	人数	割合
1. 必要（ 回 / 年）	101	83%
2. どちらかという必要（ 回 / 年）	17	14%
3. 不要	1	1%
無回答	2	2%
計	121	100%



必要回数	1. 必要	2. どちらかという必要
1回/年	26	7
2回	55	3
3回	9	3
4回	5	3
5回	2	
1, 2回	9	1
2, 3回	4	

④ 学校施設について、あなたが興味・関心をお持ちのテーマは何ですか？（複数回答可）

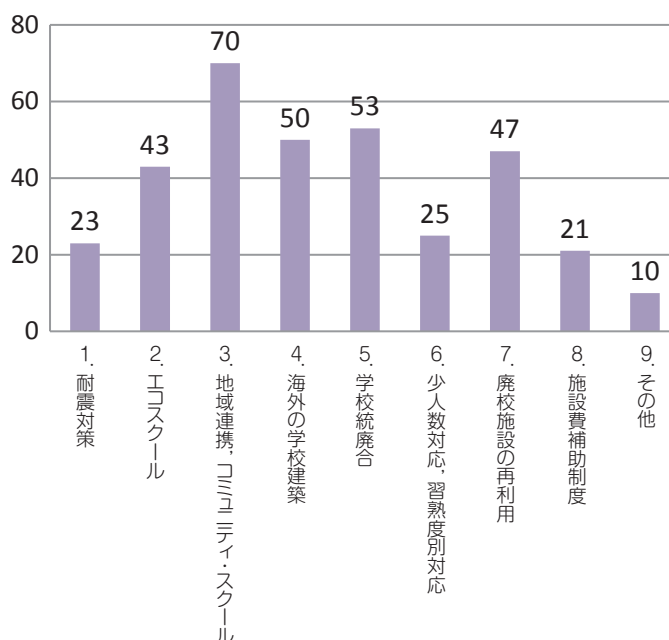
	人数
1. 耐震対策	23
2. エコスクール	43
3. 地域連携, コミュニティ・スクール	70
4. 海外の学校建築	50
5. 学校統廃合	53
6. 少人数対応, 習熟度別対応	25
7. 廃校施設の再利用	47
8. 施設費補助制度	21
9. その他	10
計	342

その他のコメント

- ・ 小中一貫・幼保小一貫教育
- ・ 長寿命化
- ・ 伝統建造物の教育への利用
- ・ 教育プログラムと建築の関連性
- ・ 老朽化対策
- ・ インクルーシブ教育

など

④ 興味のあるテーマ（複数回答）



⑤ 今回の講演会に関するご意見やお気づきの点がありましたらご記入ください。（自由記述）

- ・ パネルのテーマをもう少し切り込み、識者の意見を引き出して欲しかった。
- ・ 伝えたい思いが多く勉強になった。時間内にできるだけまとまると尚良かった。
- ・ 海外事例の学校の背景（教育制度、施設整備のための財政制度など）の概説があるともっと理解ができる。
- ・ 「学校建築」というくくりでなく、「建築全体と教育」の関わりについての論も聞いてみたい。
- ・ 地域と学校、学校と地域という関係では無く、地域＝学校、学校＝地域という事に気付いた。
- ・ 他の国の事例も色々聞きたい。
- ・ 東京の他、関西、中部（大阪、名古屋など）でも、実施していただけないか。
- ・ 椅子がかたい。テーブルがあると尚良い。会場が古く、照明が適切でない。
- ・ 質疑応答の時間をもっと増やすべき。

「地域の核となる学校づくり」講演会参加者アンケート

このアンケートは、今後の講演会について検討する際の参考とするためにお願いするものです。必要事項をご記入のうえ、講演会終了時に事務局までご提出くださいますようお願いいたします。

- ① あなたの所属する機関の該当番号に○印を付けて下さい。
- | | | |
|---------------------------------|-------------|----------------|
| 1. 国の機関 | 2. 教育委員会 | 3. 知事部局、市区町村部局 |
| 4. 大学職員 | 5. 大学教授、研究者 | 6. 学部生、大学院生 |
| 7. 小学校、中学校、高等学校 | 8. 報道、出版関係 | 9. 設計事務所、建設会社 |
| 10. その他（ ） | | |
- ② 今回の講演会について、下記の中から該当する番号に○印を付けて下さい。
- 1) 今回の講演会を何でお知りになりましたか？
- | | | |
|-------------|---------------|--------------------------------|
| 1. 研究所の開催通知 | 2. 研究所のウェブサイト | 3. ポスター・チラシ |
| 4. 新聞、雑誌 | 5. 知人からの連絡 | 6. その他（ ） |
- 2) 今回の講演会は、あなたにとってどの程度役に立ちましたか？
- | | | |
|------------|--------------|---------------|
| 1. 非常に役立った | 2. ある程度は役立った | 3. あまり役立たなかった |
|------------|--------------|---------------|
- 3) 1月という開催時期についてどう思いますか？
- | | | |
|----------|---------------------|--------------------------------|
| 1. 適当である | 2. 適当でない→(月がよい) | 3. その他（ ） |
|----------|---------------------|--------------------------------|
- 4) 水曜日の開催についてどう思いますか？
- | | | | |
|---------------|-----------|-----------|--------|
| 1. 平日(月～金)がよい | 2. 土曜日がよい | 3. 日曜日がよい | 4. その他 |
|---------------|-----------|-----------|--------|
- 5) 今回の会場についてどう思いますか？
- | | |
|----------|---|
| 1. 適当である | 2. 適当でない→(どんな点ですか？) |
|----------|---|
- ③ このような講演会を今後も開催していくことは必要だと思いますか？
- | | | |
|----------------|------------------------|-------|
| 1. 必要（ 回/年） | 2. どちらかというと必要（ 回/年） | 3. 不要 |
|----------------|------------------------|-------|
- ④ 学校施設について、あなたが興味・関心をお持ちのテーマは何ですか？(複数回答可)
- | | | |
|-------------|------------|--------------------------------|
| 1. 耐震対策 | 2. エコスクール | 3. 地域連携、コミュニティ・スクール |
| 4. 海外の学校建築 | 5. 学校統廃合 | 6. 少人数対応、習熟度別対応 |
| 7. 廃校施設の再利用 | 8. 施設費補助制度 | 9. その他（ ） |
- ⑤ 今回の講演会に関するご意見やお気づきの点がありましたらご記入ください。(自由記述)

平成26年度 国立教育政策研究所 文教施設研究講演会
地域の核となる学校づくり ―日本とスイスの学校建築― 報告書

発行年月 平成27年6月

発行者 国立教育政策研究所

〒100-8951 東京都千代田区霞が関3丁目2番2号

Copyright 2015 by the National Institute for Educational Policy Research (NIER)
All right reserved